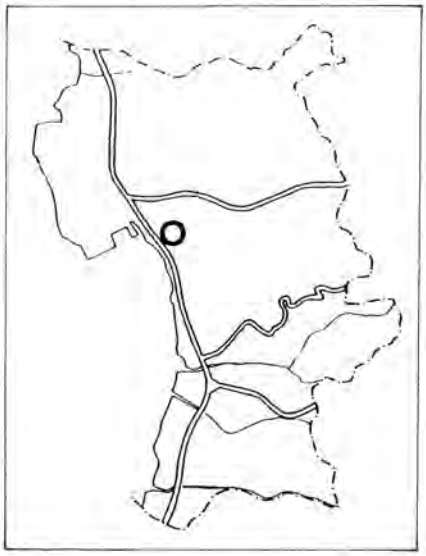
伊礼原B遺跡

—旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査—



1989年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

発掘区の設定状況

第 3 区の土層断面

第 VI 層出土の青磁片とイノシシの下顎骨

はじめに

本書は北谷町字伊平伊礼原に所在する伊礼原B遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

伊礼原B遺跡は、伊礼原A遺跡と共に河川工事の際に発見されたものの、A遺跡は現地保存で処理を行い、B遺跡は記録保存という対応を用いました。

調査の結果、下層のほうに大きく別けて、二つの時期のものが存在することが明らかになったそうです。

ひとつには、くびれ平底を特徴とする砂丘系土器から、グスク時代にかけての層と、最下層の枝サンゴで形成された層からは、やや水摩を受けた古手の土器が多量に出土したとのことです。ことに、最下層の標高は0m以下とのことで、沖縄諸島内でも数少ない、海底遺跡の可能性が強い遺跡だとのことを聞き及んでいます。

小冊子でありますが、本書が広く活用され、文化財保護の一助ともなれば幸いであります。なお、調査に際し御指導いただきました諸先生方、玉稿を賜りました松下孝幸先生、川島由次先生、知念　勇先生に末尾ながら厚くお礼を申し上げます。

北谷町教育委員会
教育長　當　山　憲　一

例　言

1、本報告書は昭和63年度、「旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る文化財調査業務」として、那覇防衛施設局と受託契約をおこなったものを、報告書としてまとめたものである。

1、人骨の所見・執筆については長崎大学医学部の松下孝幸助教授をはじめ、分部哲秋・佐伯和信・小山田常一先生の玉稿をいただいた。

1、獣骨の所見・執筆については琉球大学農学部教授の川島由次先生の玉稿をいただいた。

1、青磁の所見・執筆については鎌倉考古学研究所所長の手塚直樹先生、沖縄県立博物館学芸課長の知念　勇先生の玉稿をいただいた。

1、石質の所見は沖縄県立教育センターの大城逸郎先生からいただいた。

1、貝類の所見は、沖縄生物学会の黒住耐二先生からいただいた。

1、遺物の実測・トレースは稲嶺盛和・木塚朝行・金城キク・知念　均・津覇実秀・仲宗根秋美・町田みどりによる。

1、執筆・編集は主に中村があたった。

1、調査に際しての総ての資料は北谷町教育委員会に保管してある。

本 文 目 次

口　絵
はじめに
一　遺跡の位置と環境……1
二　調査の概要……4
　1、調査に至る経過……4
　2、調査組織……4
　3、発掘の経過……6
三　調査の内容……7
　1、層　　序……7
　2、遺　　構……8
　3、出土遺物の状況……8
　4、出土遺物……16
　　人工遺物……16
　　土　　器……16
　　陶 磁 器……27
　　石　　器……32
　　装 飾 品……32
　　自然遺物……32
四　まとめ……36
付　記
五　沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨
六　沖縄県北谷町伊礼原B遺跡の獣骨について

挿 図 目 次

第１図　北谷町の位置及び伊礼原Ｂ遺跡と周辺遺跡
第２図　伊礼原Ｂ遺跡と周辺の概要……2
第３図　伊礼原Ｂ遺跡発掘区の設定図……5
第４図　第１・２・３区東壁及び北壁土層断面図……9
第５図　第１・２・３区西壁土層断面図……11
第６図　第３区ａ小区第Ⅵ層出土の礫集中の状況図……13
第７図　第３区第Ⅵ層の出土遺物分布図……14
第８図　第３区第Ⅷ層の出土遺物分布図……15
第９図　土器Ⅰ類ａ・ｂ・ｃ・ｄ実測図……18
第10図　土器Ⅰ類ｄ・ｅ・ｆ実測図……20
第11図　土器Ⅱ類ｇ実測図……21
第12図　土器、Ⅱ類ｈ・Ⅲ類ｉ・ｊ・Ⅳ類ｋ実測図……23
第13図　土器Ⅴ類ｌ・青磁実測図……26
第14図　青花・白磁・陶器実測図……30
第15図　陶器実測図……31
第16図　貝製品・骨製品実測図……33

表 目 次

第１表　出土土器・陶磁器一覧……17
第２表　出土陶磁器観察表……17
第３表　出土貝殻種類一覧……34

図 版 目 次

図版１　伊礼原Ｂ遺跡の航空写真

図版２　上　伊礼原Ｂ遺跡遠景　　下　伊礼原Ｂ遺跡発掘区

図版３　上　第１区北側壁面の状況　　下　第１区西側壁面の状況

図版４　上　第１区東側壁面の状況　　下　第１区完掘の状況

図版５　上　第２区西側壁面の状況　　下　第２区東側壁面の状況

図版６　上　第３区西側壁面の状況　　下　第３区西側壁面の土層状況

図版７　上　第３区第Ⅵ層下面の状況（東側から）
　　下　第３区第Ⅵ層下面の状況（西側から）

図版８　上　第３区西側土層断面の状況　　下　第３区西側土層断面の状況

図版９　上　第３区西側土層断面の状況
　　下　第３区ａ・ｂ小区畦の土層断面の状況

図版10　上　第３区東側土層断面の状況
　　下　第３区東側第Ⅵ層の落込み状況

図版11　上　第３区ａ小区第Ⅵ層下面の礫状況
　　下　第３区ａ小区第Ⅵ層下面の礫状況

図版12　上　第３区ａ小区第Ⅵ層下面の礫状況
　　下　第３区ａ小区第Ⅵ層下面の礫状況

図版13　上　第３区ｂ・ｃ小区間の落込み状況
　　下　第３区ｂ小区の遺物出土状況

図版14　上　第３区ｂ小区第Ⅵ層の遺物出土状況
　　下　第３区ｂ小区第Ⅵのイノシシ下顎骨出土状況

図版15　上　第３区ａ小区第Ⅵの牛下顎骨出土状況
　　下　第３区ｂ小区第Ⅵ層の遺物出土状況

図版16　上　第３区ｂ小区第Ⅷ層の状況　　下　第３区完掘状況（東側から）

図版17　上　土器Ⅰ類ａ・ｂ・ｃ表面　　下　土器Ⅰ類ａ・ｂ・ｃ裏面

図版18　上　土器Ⅰ類ｃ表面　　下　土器Ⅰ類ｃ裏面

図版19　上　土器Ⅱ類ｄ表面　　下　土器Ⅱ類ｄ裏面

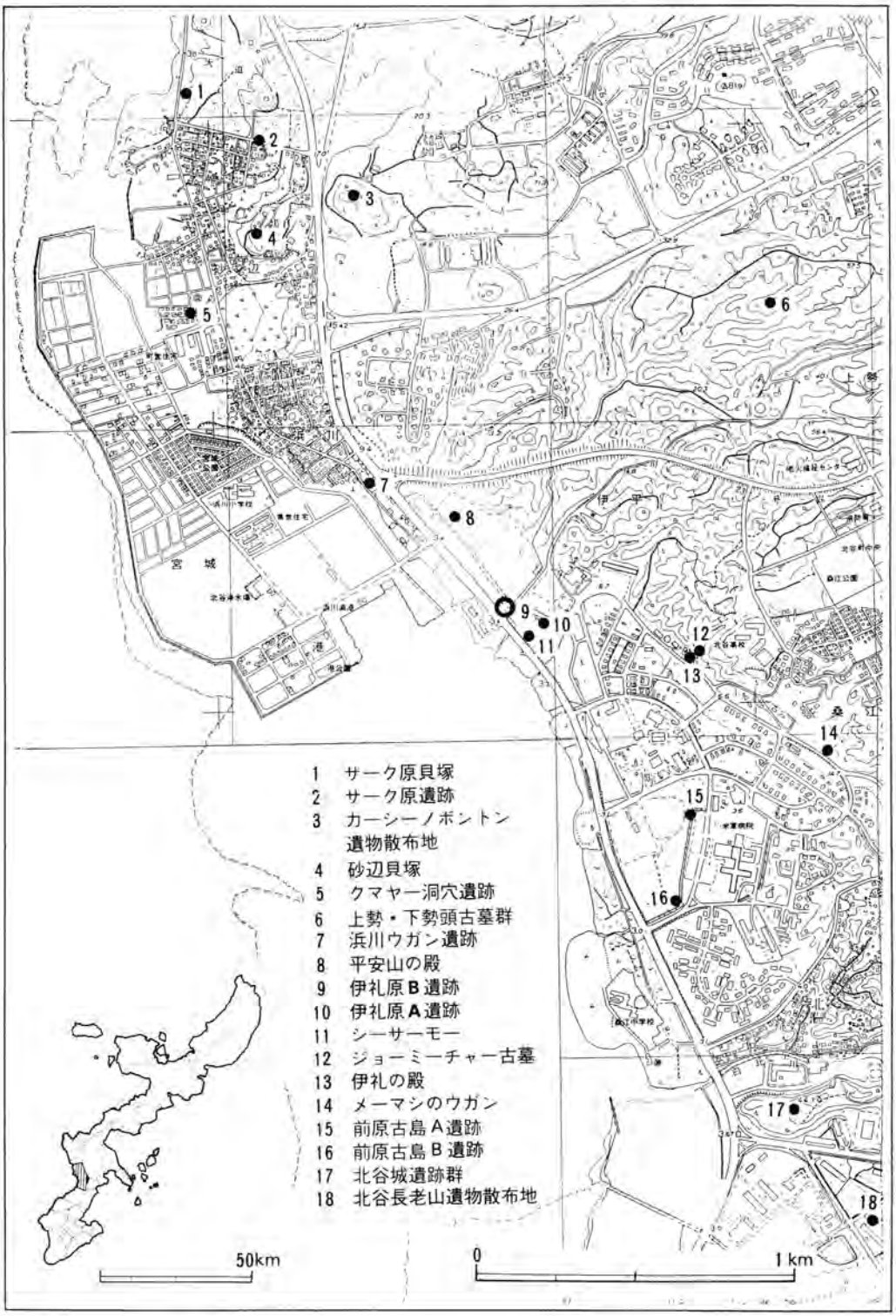
図版20　上　土器Ⅱ類ｅ・Ⅲ類・Ⅳ類表面　　下　土器Ⅱ類ｅ・Ⅲ類・Ⅳ類裏面

図版21　上　土器Ⅴ類・青磁表面　　下　土器Ⅴ類・青磁裏面

図版22　上　青花・白磁・陶器表面　　下　青花・白磁・陶器裏面

図版23　上　陶器表面　　下　陶器裏面

図版24　上　貝製品・骨製品表面　　下　貝製品・骨製品裏面



第1図 北谷町の位置及び伊礼原B遺跡と周辺遺跡

一　遺跡の位置と環境

伊礼原Ｂ遺跡は北谷町字伊平伊礼原213番地に位置し、標高0.5mから１mにかけて砂地に形成された低地遺跡である。

遺跡の位置する字伊平、字桑江一帯を沖縄本島の位置図でひもとくと、北の読谷村残波岬から、南の那覇市那覇空港ターミナルをへて、大嶺岬までの西海岸線は略〝逆くの字状〟のラインを追うことができる。いわゆる大きな〝く〟の字状の屈曲部にあたり、当地域が、本島中・南部の西海岸線が大きく湾曲する基部にあたる。

西南洋上から北上する黒潮の一部が、ここらあたりで緩やかにう回する地域にあたり、漂着物や難破船などの記録や、北谷沖で遭難すると、北の残波岬までは海岸線に沿って緩やかに流されるが、岬を過ぎると一気に伊平屋島沖まで持っていかれるとの、漁夫の伝えがある。

このことは、基部のあたりに潮の淀みができ、多量の砂泥質の堆積のみられる所となる。南の宜野湾市の大山から、北はここ伊平あたりまでつづき、ほぼ5.5ｋｍ幅500mの弧を描き、本島内でも屈指な規模の沖積低地が広がる。ここ、伊平地域のこの弧状の北西隅の先端の一帯にあたる（第１図）。

沖積低地の東側には、標高20mほどの石灰岩台地が切り立つように見られる。これは、さきの湾曲の形成と深い拘わりがあり、本島中・南部の石灰岩台地によくみられる、断層により形づくられたと考えられている。これは、沖積低地地域のボーリングの結果、石灰岩の段差が約50mほどあるということが確認されたことと、加えるに、膨大な砂泥質の堆積により沖積低地が顔をのぞいていることで、うかがい知ることができる。

これまで北谷町の遺跡は、北の砂辺部落一帯や南の北谷グスク一帯の、石灰岩台地の縁辺部に集中して存在していたが、沖積世低地と接するあたりにも、遺跡の点在することが最近の調査で明らかになった（第１図）。

新しい遺跡を紹介すると

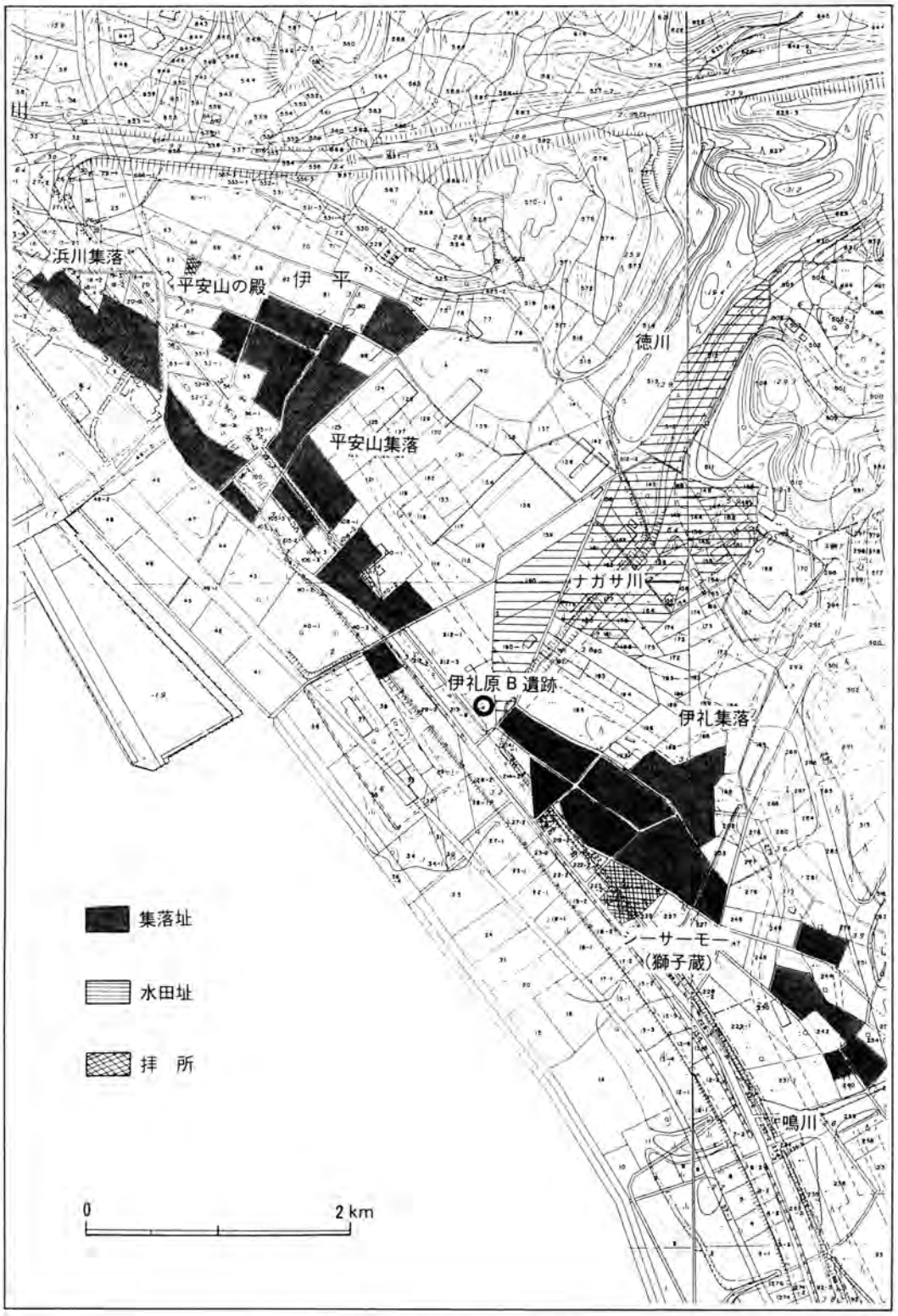
No.5　クマヤー洞穴遺跡　条痕文土器、大山式土器、宇座浜式土器、グスク時代の各時期があるが、特に宇座浜式期の埋葬址が主体。五十数体の改葬人骨が出土。

No.8　平安山の殿　旧平安山部落の拝所。祠は当地には確認できない。

No.9　伊礼原Ｂ遺跡　低地遺跡。室川下層式土器、面縄前庭式土器、仲泊式土器、面縄東洞式土器、嘉徳Ｉ式土器、伊波式土器、くびれ平底土器、グスク時代の遺物の出土する遺跡。

No.10　伊礼原Ａ遺跡　青磁、喜名焼の出土する古島遺跡

No.14　メーマシ（前桝）のウガン　字伊礼と拘わりのある拝所。この近辺で字座浜



第２図 伊礼原Ｂ遺跡と周辺の概要（地籍図）

式土器系統の土器が採集できる。

№15　前原A遺跡　喜名焼の出土する古島遺跡

№16　前原B遺跡　安南系呉須の出土する古島遺跡

などがある。

伊礼原B遺跡の周辺を概観すると、南西側の前面に単調な海岸線を持ち、北東側の背面には石灰岩台地を控えたかたちをとる。沖積低地一帯は戦後、米軍施設になっており、一見、起伏のみられない平坦な地形を呈しているものの、河川や現状や地籍図から、旧地勢の状況を伺い知ることができる（第2図）。集落は浜川・平安山・伊礼・桑江中・桑江前と現国道58号線に重なるかたちで点在している。これは南の北谷番所・北谷馬場・北谷集落・北谷前集落も同様に連なり、海岸砂丘上の微高地に形成されたことがよみとれる。

当遺跡の南東側にはシーサーモー（獅子蔵）という拝所があり、数メートルの石灰岩緻高地になっている。その東となりには、旧伊礼部落が細長く接するようにして集落のたたずまいがある。以前の微高地は、かなりの広場があったらしく、モーアシビの場としての伝承を残す。大正時代には大和旅と称する、関西方面の紡績工場への出稼ぎの折、西洋上を上る石炭船に向かい、青松葉を燃して見送ったという悲哀の地でもある。

現在は国道58号線の拡張工事に伴い、大半が削平され、切り通しのそばに、わずかに残る石灰岩の露頭に、昔の面影を留どめているのみである。ここに立てば、略南北に広がる沖積世低地のキャンプ桑江一帯が、一望の下に望むことができ、視界のきく所である。

遺跡の北東側に目をむけると、上流から流れてくる徳川が沖積世低地に接するあたりから、ナガサ川と接し、その水系を取り込んで遺跡との間に水田を作り、それをさらに取り囲むかたちで畑地が広がっている。川は北東の徳川の方から直線的に流れ、遺跡の南側をかすめ、西洋上に注いでいたとみられる。

参考文献

1、崎浜盛永　『北谷村誌』北谷村役場1961年

2、木崎甲子郎　『沖縄の自然』平凡社1975年

3、木崎甲子郎　「琉球弧構造発達史の問題点」『琉球列島の地質学研究』第3巻1978年

4、仲里栄三　「地域の地質を生かした地質領域の学習指導について」『研究報告書』第4集沖縄市立教育研究所1980年

5、沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』1983年

6、角川春樹　「47沖縄県」『角川日本地名大辞典』角川書店1986年

二　調査の概要

1、調査に至る経過

1988年３月、既に昭和62年事業として、進行中の河川工事の一部から、陶磁器の破片と骨の出土があるので、確認を求められた。

立ち会いの結果、露頭した断面の下半部分に、幅４ｍ、深さ2.5ｍの大きさにわたり、レンズ状に堆積した人頭大から拳大の石灰岩礫に混在するかたちで、陶磁器がみられ、上部に近世の、下部にわずかではあるが、喜名焼の甕の破片が採集できた。

工事責任者によると、手前の工事では、気がつかないほどの陶磁器の出土はないことから、東側向こうの奥の方に中心部があることが予測された。工事はそれ以上、拡張の予定は無いとのことから、遺跡発見の届けを以て手続きを終えることとした。

ここを伊礼原Ａ遺跡とした。

昭和63年度の事業予定にかかる河川工事の範囲については、事前に試掘調査をおこなったほうが望ましく、今回の伊礼原Ｂ遺跡の発見の発端となったいきさつがある。

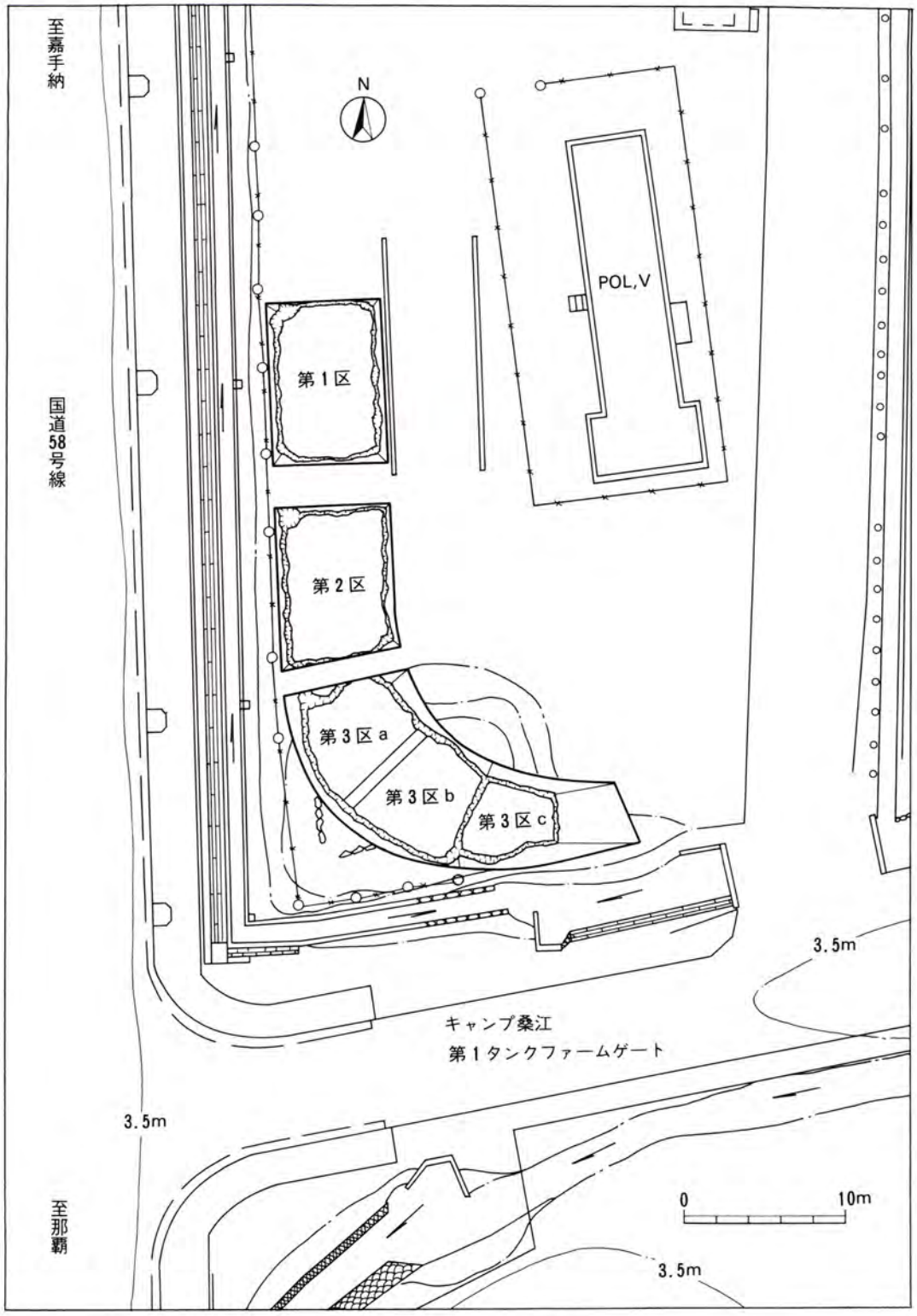
伊礼原Ｂ遺跡は字伊平伊礼原213番地にあたり、南北に走る国道58号線の右隣に位置し、一部、国道58号線と平行に流れる部分にあたる。

発掘調査面積は河川工事予定地の範囲に限り、幅７ｍ、長さ43ｍの301㎡をその対象とした。発掘区は工事予定地を、数本の油送管が横切るかたちで配管されていることから、配管の合間を任意の地区として取り扱った。配管の状況から実質的な正方形のグリット設定はできず、結果的には平行四辺形や台形の形態を採らざるえなかった。名称は、北から７×８ｍの第１区、７×９・５ｍの第２区、う回する曲線部分の７×25・５ｍの第３区（第３区は小３区ａ、ｂ、ｃと任意に細分する）に区分けし、名を付した（第３図）。

第３区の第Ⅵ・Ⅶ層の出土遺物については、すべてにドットを落とし、個別番号を付して取り上げることとした。

2、調査組織

調査責任者	當山　憲一	（北谷町教育委員会教育長）
事　務　局	比嘉　由孝	（北谷町教育委員会社会教育課長）
	親里　英文	（北谷町教育委員会社会教育課係長）
	金良　米美	（北谷町教育委員会社会教育課会計臨時職員）
	津嘉山百合子	（　同　　上　　）
調査指導	高宮　廣衛	（沖縄国際大学文学部教授）
	松下　孝幸	（長崎大学医学部助教授）
	分部　哲秋	（長崎大学医学部講師）



第3図 伊礼原B遺跡発掘区

	須田　勉	（文化庁文化財保護部記念物課調査官）			
	安里　嗣淳	（沖縄県教育庁文化課係長）			
調査主任	中村　愿	（北谷町教育委員会社会教育課主事）			
調　査　員	木塚　朝行	知念　均	津覇　実秀	金城　キク	親里ケイ子
	真栄田進喜	比嘉　ツル	野村　トミ	松島シズ子	仲宗根秋美
	糸村　秀子	比嘉　トヨ	新垣　茂子	新垣　政一	石川　喜久
	末吉　英子	中村　清弘	座喜味静子	安次嶺キク	町田みどり
	園田　淳美	稲嶺　盛和	町田　ヒデ	又吉キヨ子	宮里キミ子
	高嶺ユキ子	稲嶺　春子	當山　貞子	比嘉　富子	佐渡山良子
	賀数　朝進	古謝　トミ	砂川　直子		

3、発掘の経過

今回の発掘調査は1988年８月17日から同年10月26日の延べ70日間おこなった。

発掘は試掘調査の成果を元に、第Ⅰ層から第Ⅴ層までの客土や無遺物層を機械力を用いて、一期に掘り下げることとした。標高１ｍ前後あたりの第Ⅵ層の砂層レベルから地下水の流出がみられ、数時間でプール状を呈する状況になり、壁面の破損が見られることから、24時間、吸引機を用いて排水せざる得ない状態であった。

とくに、９月７日の夕方からの集中豪雨は、中部一帯に、２時間で190ミリという、沖縄気象台観測史上、始まって以来とのことがおこり、第１区、第２区の調査区はもとより、国道58号線以東のキャンプ桑江の大半が、冠水するというアクシデントが起こった。
10月５、６日の台風24号においても、前回より雨量は少ないものの、第３区の南隣にあたる現河川との土手幅が細く、水圧による決壊が懸念された。一部、流入口を開くことで、決壊を最小限に止どめることとした。その結果、多量の土砂の流入を招くこととなり、復旧作業には多大の時間と経費を費やすこととなった。20日間のロスであった。

三　調査の内容

1、層　序

調査区の層序は大まかに見ると、全体的にほぼ平たんではあるが、河川の至近距離であることから、流水による削平や土砂の堆積などが、幾度となく繰り返された様相や、また戦後の埋め立てによる客土や油送管施設の近くに位置することから、油送管やそれらを保護する為のフエンス柱などにより、深いものになると、後述の第Ⅵ層まで攪乱を受けている所も見られ、複雑な様相を呈していた。

層序は細分すると、16枚確認されるが、その成り立ちを加味すると、以下の８枚にまとめることができる（第４・５図）。

Ⅰ層　戦後の客土からなるコーラル（イングゥ）で淡黄褐色を呈するものである。150～200センチの厚さがある。含む礫の多少により、ａ・ｂ・ｃ・ｄと４枚に分けることができるが、ここでは割愛する。表土から、一気に後述の第Ⅵ層まで達する、油送管施設の掘り込みが、第２区の東壁や西壁に確認された。

Ⅱ層　灰褐色を呈し、有機質を含む厚さ30センチほどの海岸砂から成る混土砂層である。層中から石灰岩の切石や、彩色を施した壺屋焼の日用雑器が出土することから、戦前までの屋敷址や畑地などの、生活レベルであることがうかがい知れる。

Ⅲ層　黄褐色のシルト層で30～100センチの厚さをもつ。調査区の同層を見ると、全体的に、安定はしているものの、北側と南側の両方にゆくにつれ薄くなる。北側の方や第１区・第２区の間がやや高位レベルにあることから、全体的に北東側からの堆積と見受けられる。これを３枚に細別することができる。

Ⅲａ層　彩度の強い黄褐色で30～50センチほどの無遺物層である。

Ⅲｂ層　Ⅲａ層とⅢｃ層に挟まれた10センチほどの海岸砂層で、第１区東壁北側や第２区南よりで途切れる。第１区・第２区の壁面では白色であるが、第３区東壁面では有機質を含む灰色に変わる様相が見られる。

Ⅲｃ層　Ⅲａ層と同一の層であるが、厚さ40センチ前後の層が下面にゆくにつれ、Ⅲｂ層の砂質を増し、灰色化する。この層から喜名焼の甕の破片が得られた。

Ⅳ層　流水により、後述のⅤ層・Ⅵ層を押し流し、その結果できた川底の凹みに堆積した層である。木の葉や有機質を含む灰色砂層であるが、人工遺物はみられない。第３区の東壁面の北側よりには、幅約４メートル、深さ90センチのＵ字状の凹みや、同区の西壁面には２ヶ所に、幾重にも重なったＶ字状の堆積がみられる。東壁面と西壁面の凹みを直線的に結ぶと、北東から南西方向となり、このころの河川の流れを思い起すことができる。

Ⅴ層　有機質を多量に含む海岸砂の灰色砂層で、厚さ50センチを計る。第３区の東側よ

りでは、後述のⅥ層とは区別することが可能であるが、第1区・第2区では不鮮明で移行する様相をなす。

Ⅵ層　有機質を多量に含む海岸砂の灰黒色砂層の文化層である。削平された部分を除きほぼ60センチ前後の厚さを計る。第3区a・b・c小区の中位のレベルから、青花（染付）、青磁、いわゆる南蛮焼やイノシシの下顎骨、牛の下顎骨、馬の下顎骨が出土し、下位のレベルから砂丘系のくびれ平底が検出された。また、第3区a小区の下位レベルから、人頭大の礫の集中が、北東から南西方向への並びがみられた。

Ⅶ層　海岸砂で白色砂層の無遺物層である。これは、第1区・第2区や第3区a・b小区にはみられず、第3区c小区のみにみられる層である。b・c小区を便宜的に分けた溝と並列するかたちでみられ、急に落ち込む状況で境を形成していた。遺跡周辺の試掘調査の成果を加味すると、白色砂層は、ここを境として南東側に広がる様相をなすものと考えられる。

Ⅷ層　珊瑚岩鬼が一面にみられる海底堆積物の層で、枝サンゴから成る混礫砂層である。深さ50センチの所まで土器の出土をみたが、それ以下では確認できず、100 センチほど掘り下げた段階で、一応、終了した。土器は多少ローリングを受けているものの、強固でタイプを識別できぬほどの摩滅ではなかった。第1区・第2区では数点と少なく、第3区b・c小区に集中することから、そお遠くない南東側に、中心部は存在するものと考えられる。

2　遺　構

第3区a小区の第Ⅵ層の下位レベルで、人頭大から拳大の礫が、北東から南西方向にかけて集中してみられた（第6図）。大半がサンゴ石灰岩礫であるが、中には近辺で確認されない硬砂岩もみられた。周辺部では、切り口が鋸状な物で直角に切断された直径十数センチの木片が、数ヶ所に重なる状態で散見された。

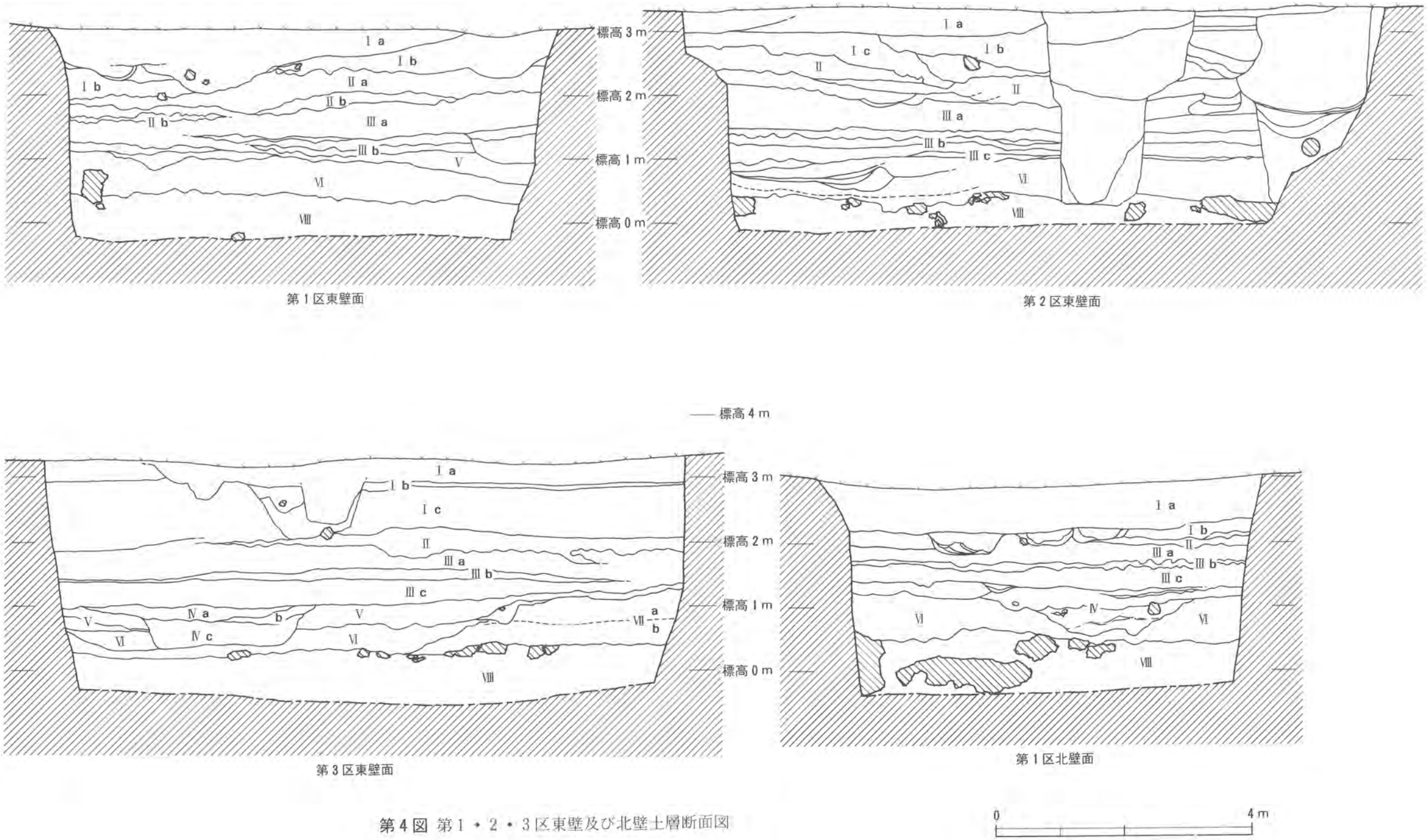
また、第Ⅵ層出土の遺物もこれを境として、北西側の第1区・第2区には見られないことや、後述の獣骨の中でも、イノシシ・犬・牛・馬などの下顎骨が他の骨種に比べ、特に多く目に付くことや、グスクからでもあまり出土を見ない青磁や青花、陶器などの瓶や香炉という、祭祀に拘わる器種が存在することなどから、単なる礫群とは考えがたい。しかし、遺構とするには不十分であり、今後の資料の増加を待って判断したい。

一応、この稿で取り扱っておきたい。

3　出土遺物の状況

イ、第Ⅵ層の出土遺物の状況

第Ⅵ層の遺物の出土状況は、第3区a小区の礫集中地域から、第3区b小区にかけての



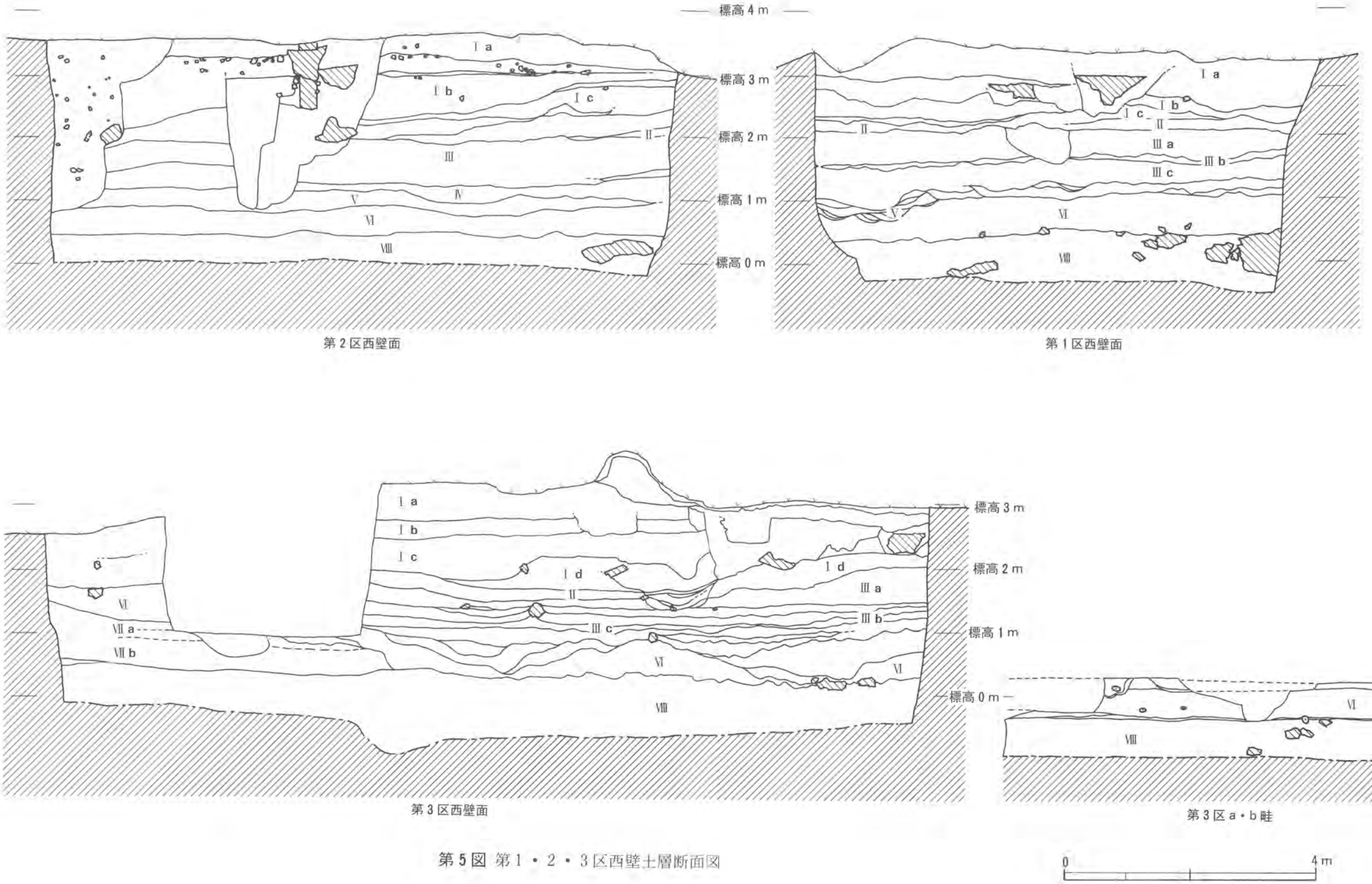
第 1 区東壁面

第 2 区東壁面

第 3 区東壁面

第 1 区北壁面

第 4 図 第 1 ・ 2 ・ 3 区東壁及び北壁土層断面図



第 2 区西壁面

第 1 区西壁面

第 3 区西壁面

第 3 区 a・b 畦

0 4 m

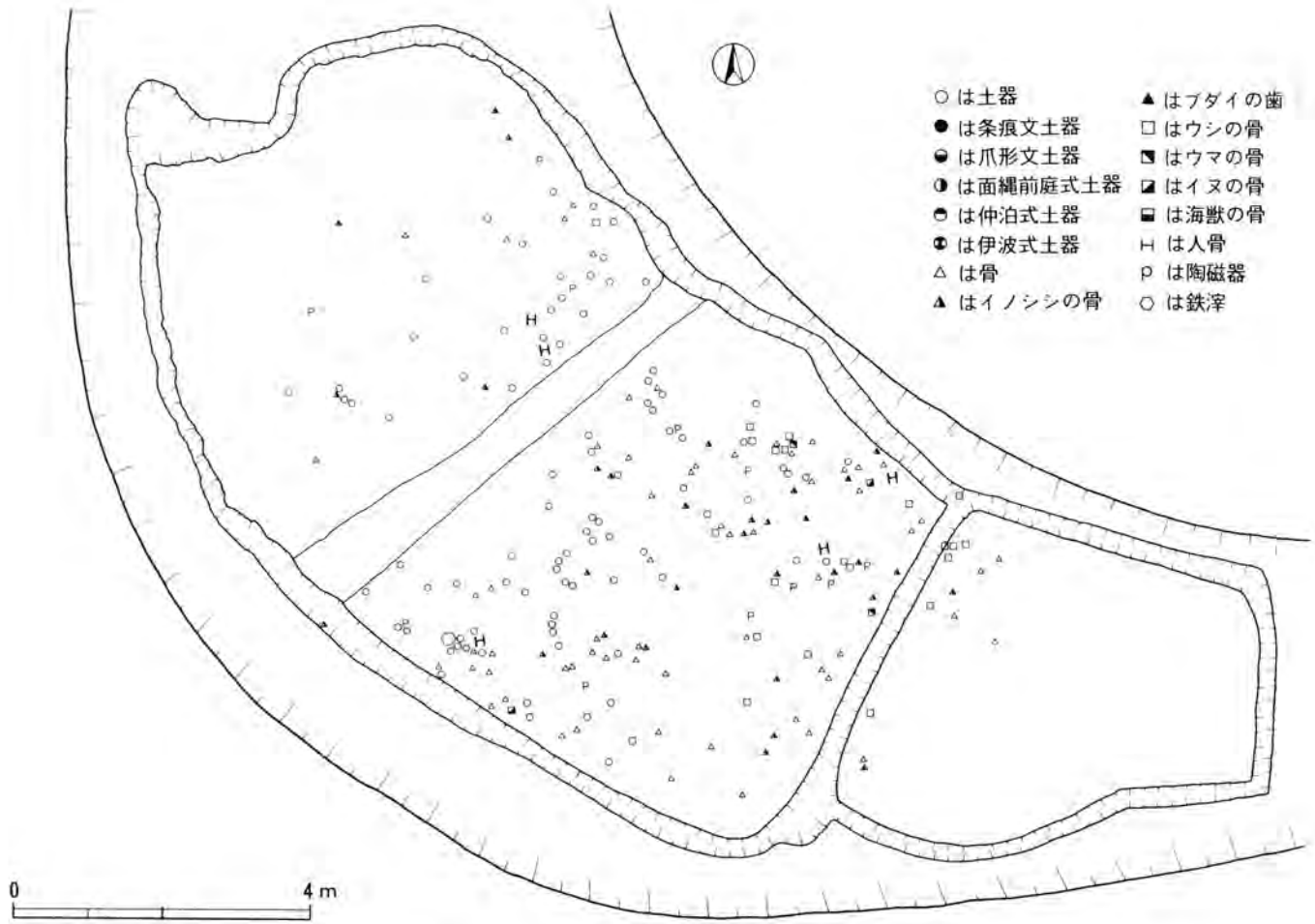
第 5 図 第 1 ・ 2 ・ 3 区西壁土層断面図

第6図 第3区a小区第Ⅵ層出土の礫の状況

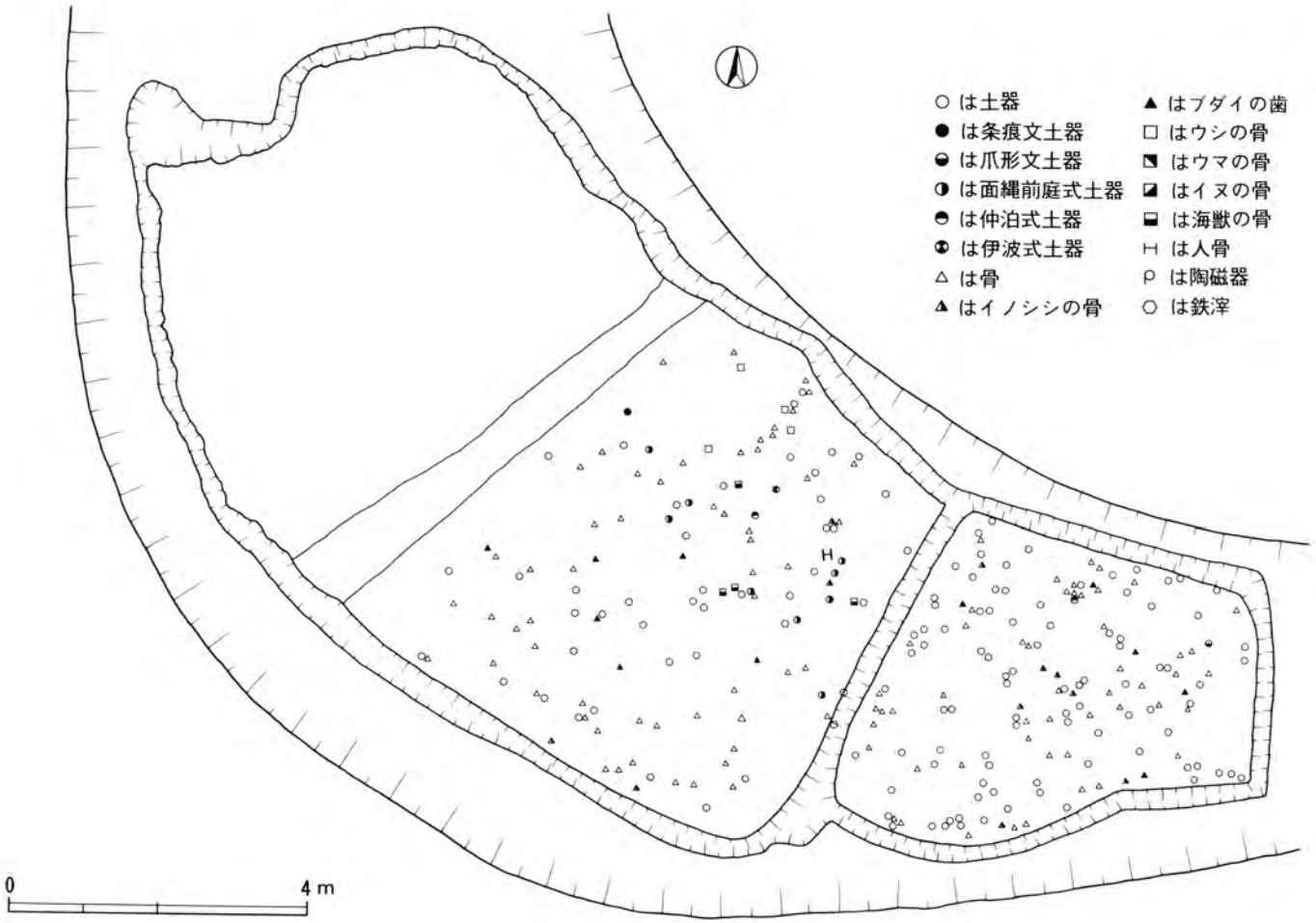
みにみられ、ほかの第1・2区や第3区c小区には広がらない（第7図）。このことは、第3区a小区の礫集中地域と同c小区にみられる第Ⅶ層との間に分布していることが知れる。その中でも右側半分（東側）にブタイの歯や獣骨、陶磁器の集中がみられ、左側半分（西側）では土器（第Ⅴ類土器）の分布が多いことに気付く。レベル的にも前者がやや高く、後者は低い位置で検出された。全体的に20センチ前後の差であった。層位的にも時間差を確認することができた。

ロ、第Ⅷ層の出土遺物の状況

第Ⅷ層の遺物の出土状況は、第1区の南西角で2点、第2区の北西角で2点のみ検出したのみで、大半は第3区b・c小区で、その広がりの分布を示していた（第8図）。c小区よりb小区の区域のほうが密度が薄く、しかも、北西側にゆくにつれ減少する傾向があ



第7図 第3区第Ⅵ層の出土遺物分布図



第 8 図 第 3 区第Ⅷ層の出土遺物分布図

る。このことから、第Ⅷ層の南東側に同層の中心部は広がるものと思われる。

出土遺物については、ｃ小区にブタイの歯が目に付くというほどである。

4、出土遺物

人工遺物

人工遺物の出土状況は、第１・２区の第Ⅷ層で４点の土器が確認されたのみで、その大半が第３区の第Ⅵ・Ⅷ層で検出された。種類別に見てゆくと、土器が最も多く、次いで南蛮・青磁・白磁と漸次減少してゆく。（第１表）。

他の人工遺物は、貝製品１点、骨製品２点、チャート製チップ２点が得られたのみで、極めて少なかった。

第Ⅲｃ層出土の陶器については、散布する程度であることから、実数からは省き、紹介のみにとどめた。

また、土器は多少、水摩を受けていたが、南蛮・青磁・白磁・陶器などの陶磁器類はその痕跡がまったく見受けられなかった。

土器

出土土器の総数は430個で、総て少々の水摩を受け破片であった。よって、器形をうかがいしるものはないが、形態や文様の特徴を摩滅するほどのものではない。

Ⅰ類

５ｍｍ前後と薄手の土器もあるが、大半が１ｃｍをはかる厚手の土器で、２～３ｍｍの粗い石英や角閃石を多量に含む土器である。内外器面に条痕文を強く持つものもあるが、ナデにより消され、その痕跡のみを残すものである。褐色や暗褐色をなす。厚手がやや砂質で脆弱であるのに対し、薄手のものは緻密で堅い。

文様の相違により、つぎの６種に分けることができる。

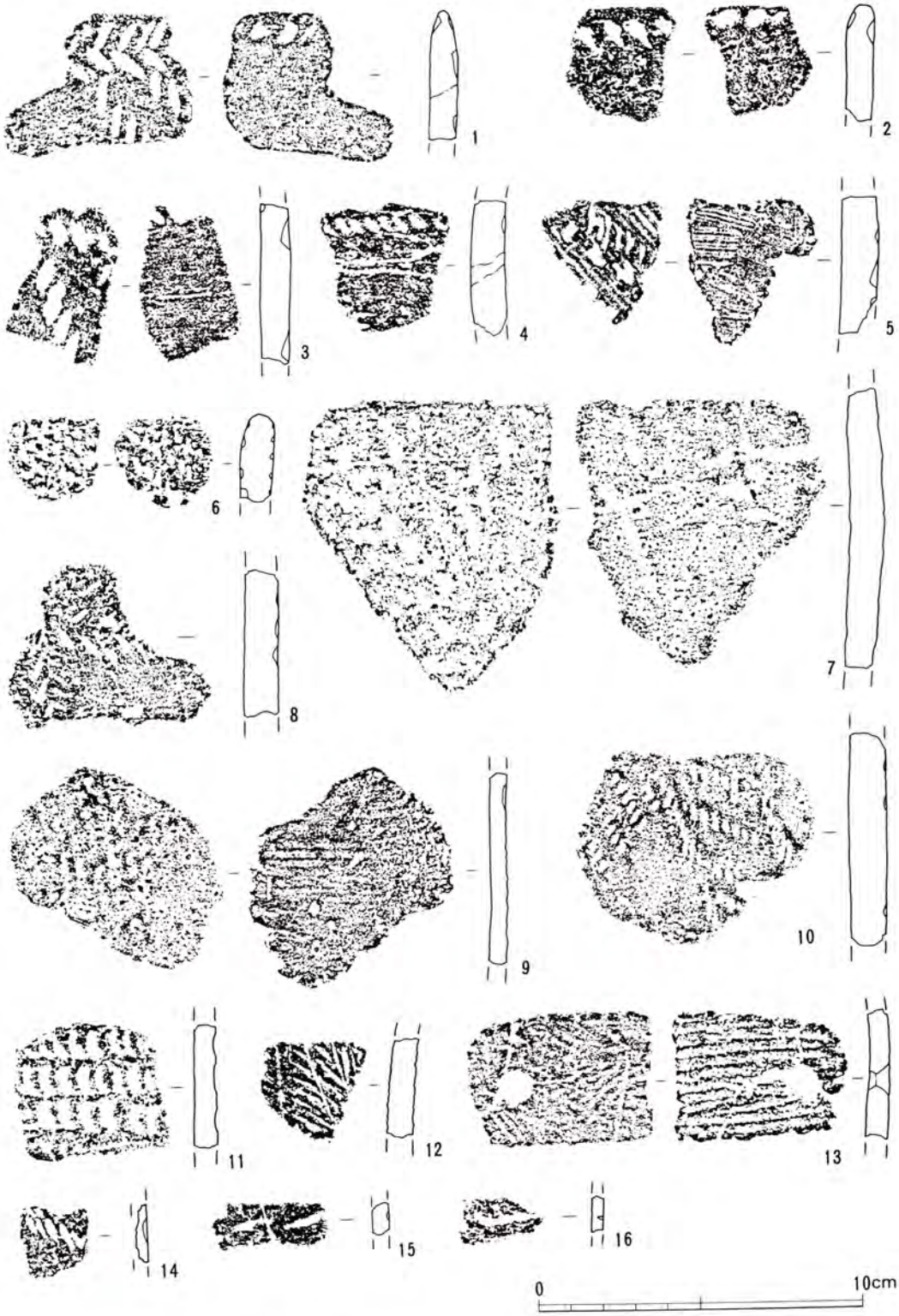
Ⅰ類ａ　施文具の先端が鈍い工具で押捺するものである（第９図１～３・５・８）。

同図１・２は厚手の口縁部片で、いずれも舌状を呈する。口縁部の内外器面に斜めに押捺した文様が横走する。大きめの同図１の外器面では、２段目にも施され羽状を呈し、その下位の３段目からは斜めに施文される土器である。同図３は外器面の文様の特徴や、内器面に斜めの文様の痕跡が見られることから、口唇部が欠如したもので、同図１と類似した特徴を持つものと考えられる。

同図５・７・８は２～３本を単位として斜めに施された胴部片である。同図５はその単位に沿って、さらに細かな刺突文を加えたもので、内外器面に条痕を持つ土器である。同図７は摩滅の著しい、大きめの胴部片である。外器面の凹凸から辛うじて、３条の左斜めの押捺文が確認できる土器である。同図８はやや細かな施文具により、羽状文が横走・斜

		第1区								第2区								第3区a																第3区b																第3区c																合計
		Ⅷ								Ⅷ								Ⅵ								Ⅷ								Ⅵ								Ⅷ								Ⅵ								Ⅷ								
		口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				口縁部		胴部		底部				
		有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	有	無	有	無	尖	平	(平	丸	
Ⅰa	個																	1	1		10	1			1		1		2								42					2			6													2	4	1	14					88
	重																	22	2		132	30			40		45		11								465					33			250													38	64	12	326					1490
Ⅰb・c	個																																												1																3					4
	重																																												20																23					43
Ⅰd・e・f	個				2								2																															4	11	1															7					27
	重				10								15																															11	236	19															197					488
Ⅱg	個																	1		1	13	2						1	3						2	4	69	1							5								1								35					138
	重																	10		20	127	18						3	20						17	37	387	10							68								10								306					1033
Ⅱh	個																			5																	11		1														1												1	19
	重																			36																	93		18														5												18	170
Ⅲi・g	個																			4			1												1		6					1			1													1	1		3					19
	重																			79			10												10		50					35			10													10	10		10					224
Ⅳ	個																																				1																													1
	重																																				10																													10
Ⅴ	個																		1		25		1											3肥	4		83																			1					9					127
	重																		10		186		29											34	70		531																			12					56					928
グスク土器	個																				2																2	3																												7
	重																				14																21	45																												80
青磁	個																																	1	2		1		3																											9
	重																																	10	50		80		330																											470
南蛮	個																				5																14																													19
	重																				104																248																													352
合計	個				2								2					2	2	10	55	3	2		1		1	1	5					4	9	4	229	4	4			3		4	24	1							2			1		2	5	2	71				1	458
	重				10								15					32	12	135	563	48	39		40		45	3	31					44	147	37	1905	55	348			68		11	584	19							15			12		38	74	22	918				18	5288

第1表　出土土器・陶磁器一覧



第9図 土器Ⅰ類a・b・c・d実測図

走する土器である。器面の保持は良く、丁寧にナデられている。同図14も細かな羽状文を施文する緻密な胴部土器片である。内器面過半部が欠落するため、一見、薄手のものに見受けられる。

Ⅰ類b　櫛状な施文具で押捺するものである（第9図4・6・9・10）。

同図4は横位に施文する胴部である。上端部と中央部に数個の接合面が観察され、幅の狭い粘土紐で形成されたことが知れる。脆弱な土器片である。同図6は丸みをおびた口縁部を持つもので、内外器面に斜位に連続して施文するものである。内器面には、その下位にもⅠ類aと同様な文様が施文され、文様帯となっている。同図9は器壁が5mmと薄く、硬質である。外器面は斜位の文様ともに不鮮明であるが、内器面には横位の条痕が残る胴部片である。同図10は厚手で重量観のある胴部片である。斜め方向に押捺した後、その両端を縦に重ねて、斜めの基本文様帯を作り、これを軸に逆斜めの方向に再び施文し、逆V字状の文様を構成するものである。

Ⅰ類c　弧状の幅広の施文具を用いて押捺するものである（第9図11）。

1例のみの出土である。同図11は幅1cm前後の幅で、横位に連続的に押引を施し、それを4段重ねた胴部片である。全体的に暗褐色を呈する重量観のある土器である。

Ⅰ類d　鋭利な工具で沈線を施すものである（第9図12・15・第10図5・6）。

同図12は外器面に斜めのシャープな沈線を3本もつもので、また、内外器面には地文に条痕をもつ保存の良い胴部片である。同図15は1cmほどの短い沈線をやや右上がりに施した胴部小片である。胎土が緻密で褐色をなすことから、これまでのものと、やや異なるが、沈線文とのことで、ここで取り扱っておく。第10図5・6は横位にやや深めの沈線を2本もつものである。同図6はカーブの形状から底部に近い胴下半部のものと考えられ、底部近くに文様をもつ土器である。両者ともナデられ、器面保持の良い硬質のものである。

Ⅰ類e　地文に強い条痕をもつものである（第9図13、第10図1～4）。

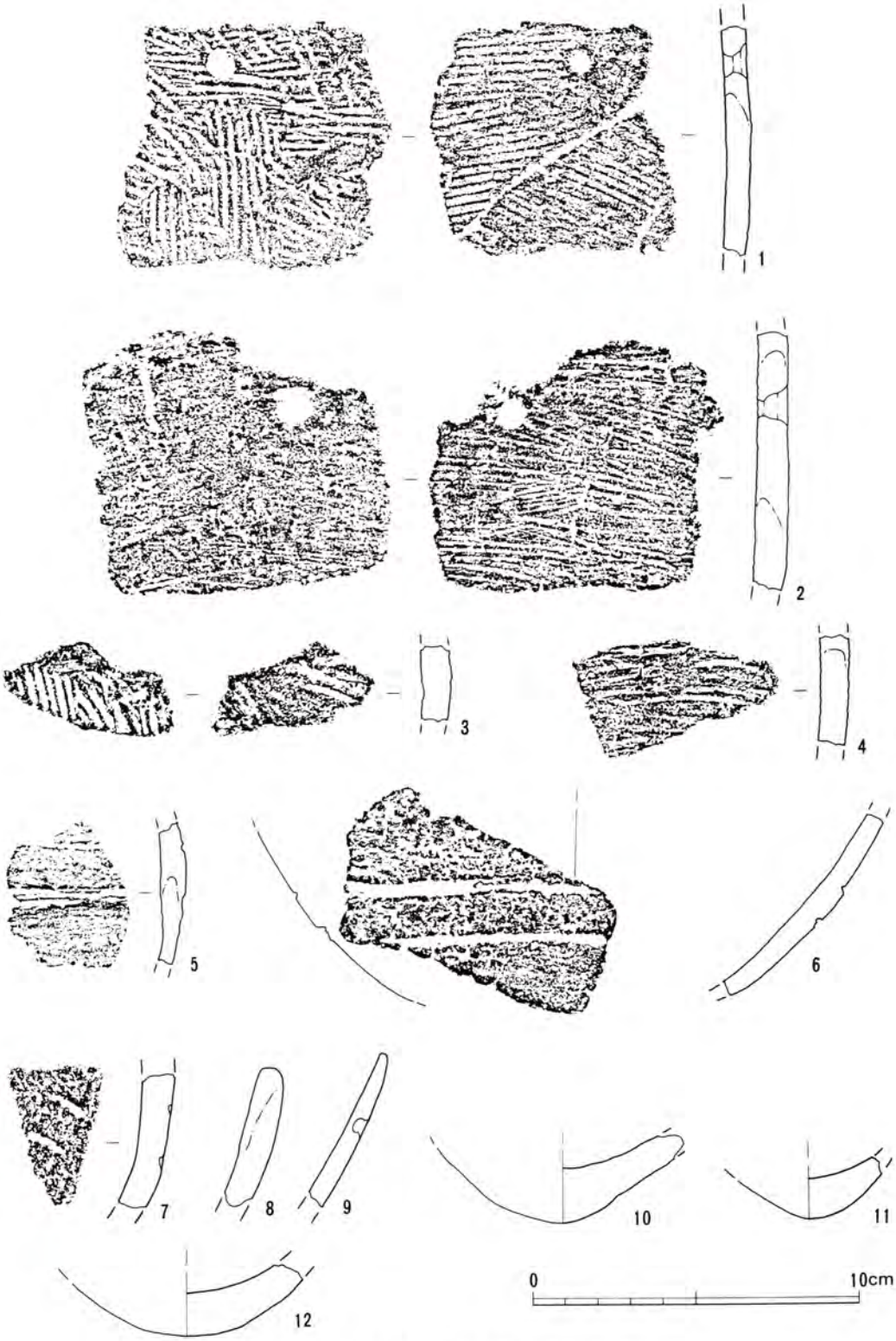
いずれも胴部片で、厚手の土器である。第9図13・第10図1・2には補修溝の穴が外器面からは深く、内器面側からは浅く穿たれている。条痕文の中でも第10図3が最も深く施文され、同図2が最も浅い。色調は全体的に褐色を呈するが、同図2は暗褐色で内器面の一部や断面に炭化物の付着がみられる。

Ⅰ類f　貝殻の腹縁部で押捺されたものである（第10図7）。

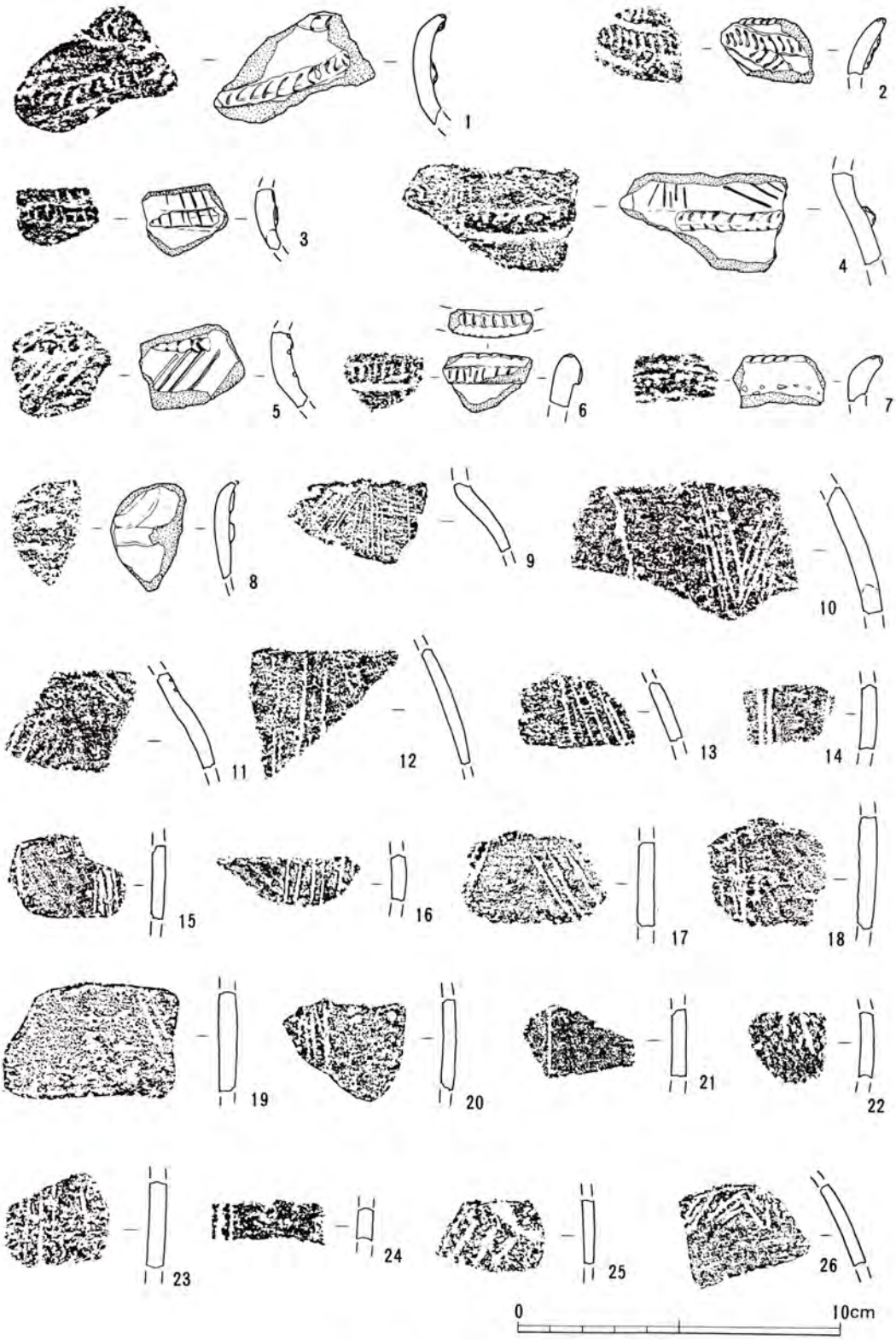
1例のみの出土である。斜めに下から押捺されたもので、断面の形状から底部に近い部分の胴部片と思われる。

その他、無文の口縁部片がある（第10図8・9）。

同図8は丸みをおびた口縁部片で、砂質の脆弱な土器である。口縁部近くや下端部に接合面を持つものである。同図9は先細のやや内湾する口縁部片である。中央部に外器面から途中で終えた穴が見られる。胎土は緻密で硬質である。



第10図 土器Ⅰ類d・e・f実測図



第11図 土器Ⅱ類ｇ実測図

第10図10～12はⅠ類の底部と考えられる土器である。

同図10は底端部近くから、弱い膨らみをもつ丸底の土器である。胎土は緻密で褐色を呈する。その特徴から第９図２の土器に類似性が認められる。同図11は器壁が薄く径が小さいことから、小形の尖底土器と考えられるものである。胎土は緻密で褐色を呈する。

同図12は厚手の丸底土器で縁辺部に接合面がみられるものである。器壁は厚く砂質で脆弱な土器である。

以上、Ⅰ類を概観したが、Ⅰ類ａ・ｂ・ｅ・ｆの土器は大まかに、室川下層式土器の範囲のなかで捕らえられるものと考えられる。Ⅰ類ｃの土器は渡嘉敷村船越原遺跡に類例をみることのできる資料である。Ⅰ類ｄの土器については、今後の資料の増加をまって検討したい。

Ⅱ類

４～５ｍｍと器壁が薄く、全体的に均一を保ち、しかも胎土に１ｍｍ以下の金色の雲母を多量に含むことで、他の土器とたやすく区別できる土器である。

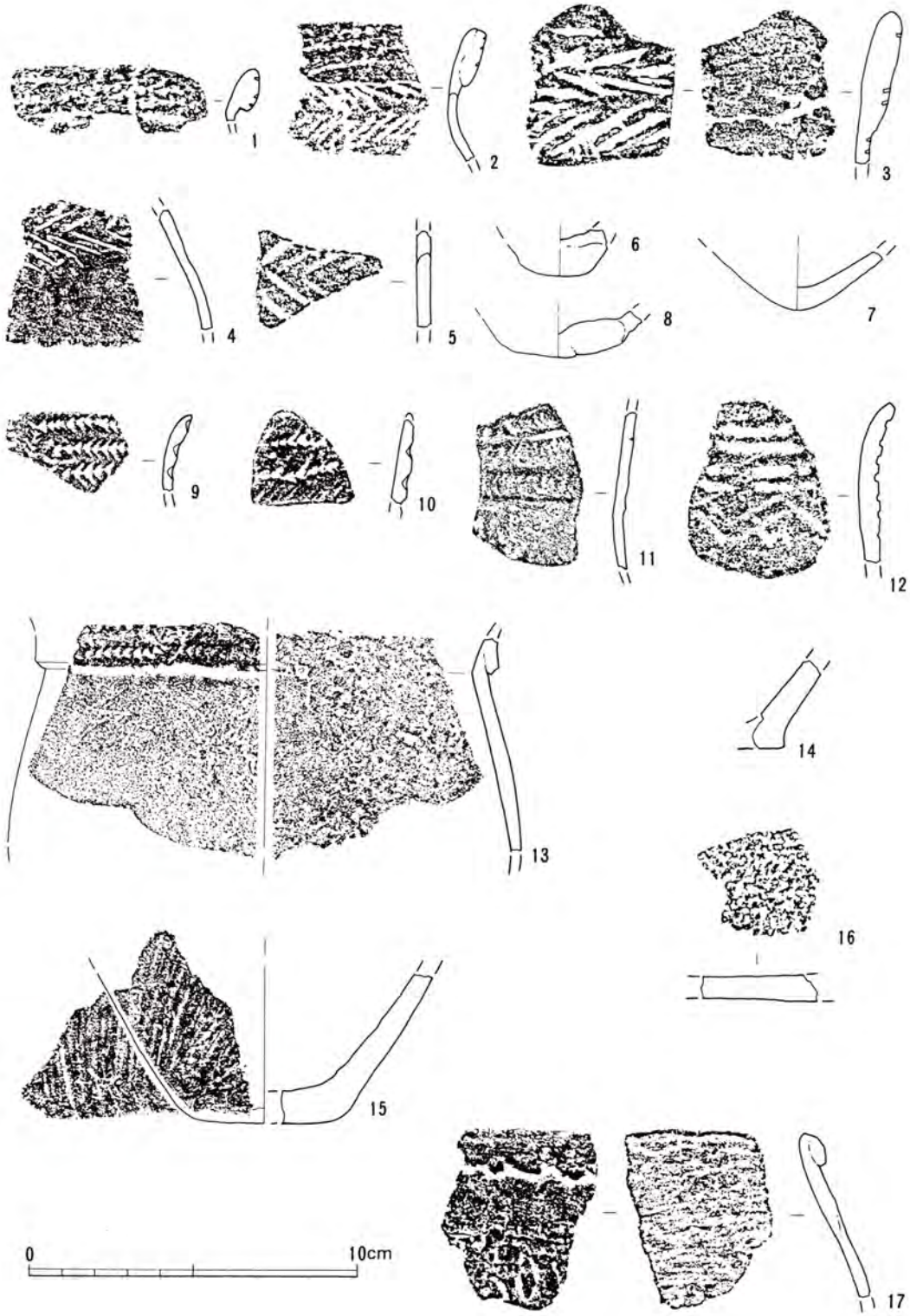
Ⅱ類ｇ　口縁部が著しくそり返り、脛部で締まり、再び肩部で張り出しながら胴部で最大径を測り、そのまま尖底の底部に移行する土器である。口縁部直下や肩部に突帯を巡らし、その間やその下位に縦位や斜位の細沈線を施文する特徴をもつ。

第11図１～８が口縁部から肩部にかけてのもので、突帯の上には叉状の刺突文が施されているもの（同図１～５・７）や細沈線で刻むもの（同図６）がある。ただ、同図８は突帯の上部が削られて判然としない。突帯はウエーブを描くもの（同図１・２・８）や直線的に巡らすもの（同図３～５）がある。口唇部にも突帯と同一の文様が施されている。同図１・２・７には叉状の刺突文が、同図６には細沈線で刻まれている。同図１・２・４～６は灰褐色を、同図５・７は褐色、同図８は暗褐色を呈している。

第11図９～26は肩部から胴部にかけて沈線文を施したものである。同図９～13・26は肩部の資料で、数個を単位とする細沈線文により、斜位やＶ字状に文様が構成されている。文様は胴部までつづくものであるが、同図26は肩部のみで終える古式のものもある。色調は灰褐色の硬質のもの（同図９・12～15・18・19・21・23・25）や、暗褐色でやや硬質のもの（同図11・16・20・22・24）、褐色でやや軟質のもの（同図10・17・26）にわけられる。

Ⅱ類ｈ　口縁部の部分が肥厚する土器である（第12図１～８）。さらに肥厚口縁部に貝殻の腹縁部で押捺するもの（同図１・２）と、やや太めに羽状の沈線文を施文するもの（同図３）に細分することができる。

同図１は口縁部に幅１ｃｍ前後の粘土帯を張り付けて、段をもつ肥厚部を形成するものである。肥厚部には貝殻の腹縁部でやや斜めに押捺するものである。胎土はかなり脆弱で黄褐色を呈する土器である。同図２は同図１と同じ技法をとるものであるが、1.８ｃｍ



第12図 土器Ⅱ類h・Ⅲ類i・j・Ⅳ類k実測図

とやや幅広の肥厚部を持つものである。肥厚部には3例の押捺を施し、段の下位には細沈線により羽状文を構成している。器面の保持がやや良く、灰褐色を呈する土器である。

同図3は山形の部分を特に厚く作る肥厚口縁土器である。肥厚部と脛部は段を作らず緩やかである。やや太めの沈線で肥厚部には羽状文を、脛部には逆斜線状に施すことにより、全体としては綾杉文を構成している。山形口縁部の直下には横位の短い沈線文を、さらに脛部の下位には3本の縦位の沈線を施している。内器面には丁寧なナデが残るほど硬質な土器である。色調は灰褐色を呈する。同図4は細沈線の羽状文を持つ胴部片で、同図5はやや太めの沈線で羽状文を持つ胴部片である。前者が暗褐色で、後者は黄褐色を呈する。

同図6～8はⅡ類gの底部と考えられるものである。

同図6は底面がやや平になったものに対し、同図7は尖端まで整った尖底土器である。同図6は底面がやや丸みをもつもので、巻き上げの痕跡を遺すものである。同図6が褐色を呈し、同図7・8は灰褐色を呈する。

以上、Ⅱ類を概観した。Ⅱ類gはいわゆる面縄前庭式土器である。第11図1のように古式の様相を持ち、具志川C式とも考えられるが、細片の為、全容を伺い知ることができない。また、同図6のように後続するものも見受けられる。Ⅱ類hの貝殻腹縁部により押捺を施す土器は仲泊式A式土器で、沈線で羽状文を施す土器は仲泊B式土器に比定できるものと考えられる。

Ⅲ類

Ⅲ類i　口縁部に肥厚部を持ち、その肥厚部に爪形文を施すもので、シルト状に細かい胎土をもつ土器である（第12図9～11・13）。

同図9はそり返りをもつ口縁部片である。文様は深く矢刀状の押引文が、左から右へ〝Γ〟状に3列つづくものである。同図10も同様な文様をもつもので、口縁部の先端が欠如した土器である。

同図13は脛部から胴部にかけての大形片で肥厚部との間に段を形成する。これも同様な文様をもち、しかも、その間に細沈線で〝Γ〟状の区画を施す土器である。同図11は摩耗を強く受けたものであるが、文様を認めることができる土器である。肥厚部に弧状の爪形文を横位に施したもので、その間を細沈線文で区画しているものである。同図9・10・13は鮮やかな褐色を、同図11は灰褐色を呈し、いずれも緻密で硬質な土器である。

同図14はⅢ類の底部と考えられるものである。底面からの立ち上がりが鋭角な平底土器である。褐色を呈する。

以上、Ⅲ類土器を概観したが、同図9・10は面縄東洞式土器に、同図11・13は嘉徳Ⅰ式土器に比定できるものと考えられる。

Ⅳ類

Ⅳ類k　口縁部が反り返り、その部分に又状の施文具で連点文や1cm前後の短沈線文、

あるいは鋸歯状文が施される土器である。

同図12は外器面が摩滅しているものの、文様を認めることができる土器である。口縁部下には2列の連点文を施し、3列目には鋸歯文を施す土器である。1mm前後の石英を多量に含む褐色の土器である。

同図15は同類のものと思われる底部である。底部からの立ち上がりは丸みをもち、その部分から上位へ、整形の擦痕をもつ。

Ⅳ類は叉状工具による連点文や鋸歯文による文様の構成から、伊波式土器に比定できるものと考えられる。

Ⅴ類

Ⅴ類Ⅰ　赤粒を混入する泥質の土器である（第12図16・17、第13図1～9）。

第12図17、第13図2～6は無文の口縁部片である。同図17は口唇部を折り曲げ、整えることにより、丸みの肥厚部を作り出している。粗雑な土器である。第13図2・3・4は口唇にフラットな面をもつもので、弱い反り返りが見られる。同図2には外器面に、同図4には内器面に指頭痕が残る。同図5・6は口唇部に丸みを持つものである。同図5は肩部から口縁部にかけ細まりながら、やや外側に開くもので、横位のナデが施される土器である。

第13図1は口縁部や口唇部に文様を持つ有文土器である。工具の先端が裂けたもので、口縁部は凹線で描き、フラットな口唇部には押捺が施される。

第13図6～9はⅤ類の底部と思われる平底の土器である。底面がやや上げ底を呈し、立ち上がり部分がくびれる平底である。

以上、Ⅴ類の土器を概観したが、Ⅴ類土器はくびれ平底で特徴づけられるように、俗に砂丘系土器と呼ばれる後期後半以後のものに比定できるものと考えられる。

まとめ

これまで、5類11種に分類して、出土土器を概観した。

Ⅰ～Ⅳ類は第Ⅷ層で、Ⅴ類は第Ⅵ層で出土するという層序の相違がみとめられた。

第Ⅷ層内のなかでは、Ⅰ類a・b・e・fの室川下層式土器

Ⅱ類gの面縄前庭式土器

Ⅱ類hの仲泊A・B式土器

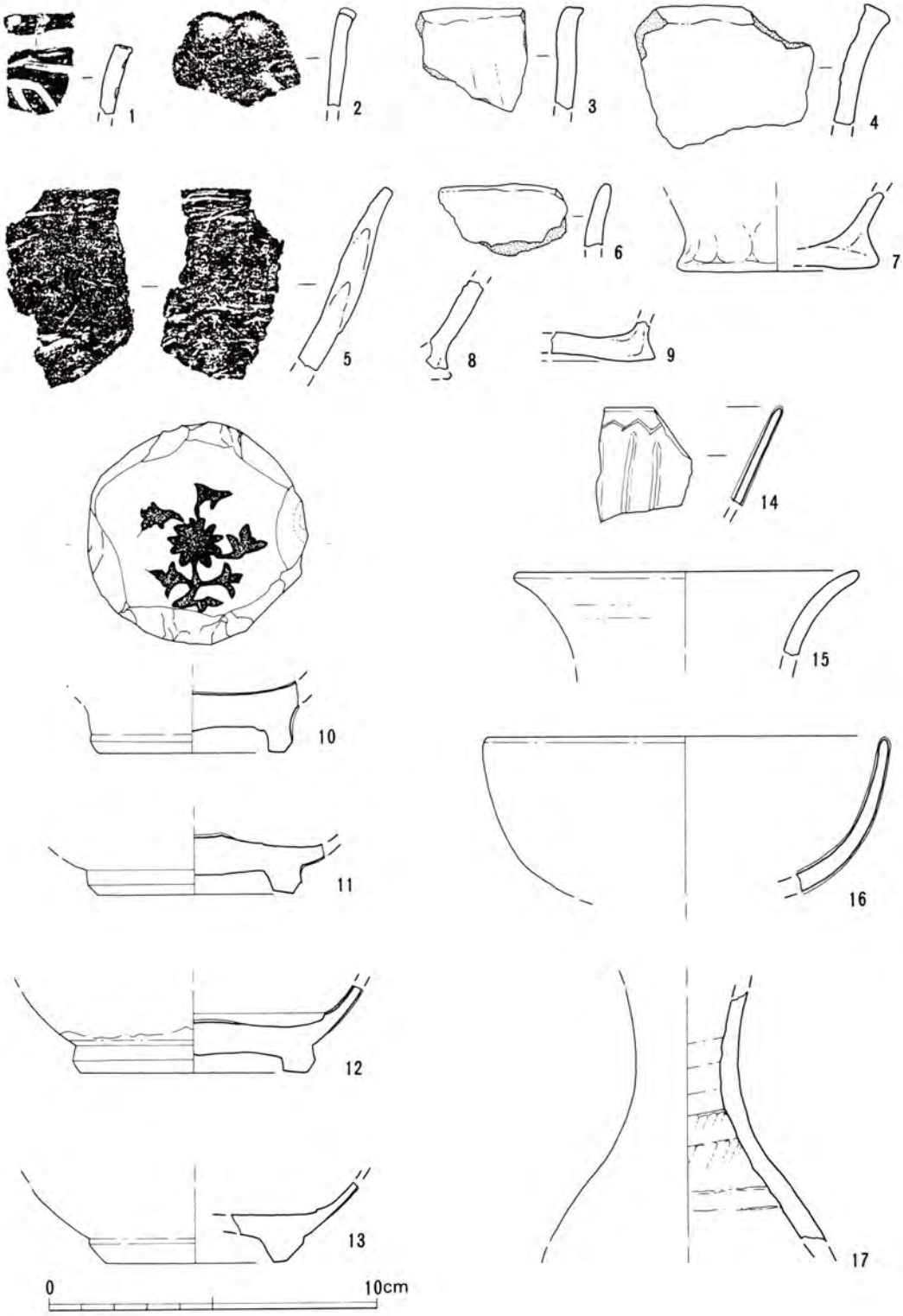
Ⅲ類iの面縄東洞式土器

Ⅲ類jの嘉徳Ⅰ式土器

Ⅳ類kの伊波式土器

との6形式の土器が確認されたが、大まかな時期はⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類、Ⅳ類に分けられると考えられる。

（中村）



第13図 土器Ⅴ類Ⅰ・青磁実測図

陶磁器

陶磁器の総数は29個である（第1表）。
その所見は以下の観察表で示した。

挿図版番号	出土地点	層位	種別	器種	口径 器高 底径 (cm)	素地 胎土	施釉 器色	文様	器形・形状 口縁	高台	その他
第13図10		第Ⅵ層	青磁	碗	―― ―― 6.3	灰白色	内面は全面と外面畳付まで畳付から外底貫入なし	内底見込みに印花文	―――		―――
第13図11		第Ⅵ層	青磁	碗	―― ―― 6.1	灰白色	豆青色内底部は見込み中心部を残し露胎外側は高台内は露胎貫入無	なし	―――		―――
第13図12		第Ⅵ層	青磁	碗	―― ―― 6.1	灰白色	黄褐色内底部中央部以外は露胎外底部高台より内側は露胎露胎部は赤褐色に発色	なし	―――		―――
第13図13		第Ⅵ層	青磁	碗	―― ―― 5.4	白色	灰釉色現存部では内面と外底部は露胎	なし	―――		―――
第13図14		第Ⅵ層	青磁	碗	―― ―― ――	白色	緑色のうすい釉がかかっている。貫入あり	細線の蓮弁文	―――		―――
第13図15		第Ⅵ層	青磁	腰折れ皿	10.7 ―― ――	乳白色	豆青色貫入は見られない	なし	―――	―――	撫で肩
第13図16		第Ⅵ層	青磁	碗	11.9 ―― ――	灰色	灰白色	なし		―――	胴部に円味
第13図17		第Ⅵ層	青磁	花生	―― ―― ――	白色	緑色に発色し貫入が顕著に見られる	なし	―――	―――	撫で肩
第14図1		第Ⅵ層		伊万里青花	―― ―― 5.7	白色	畳付以外は白釉がかかる	内底周囲と高台に圏線内底見込みには花文（青花）	―――		―――
第14図2		第Ⅵ層	青花	花生	―― ―― ――	白色	内外面に白色の釉	牡丹唐草文頚部から胴部の破片	―――	―――	胴から頚部間の継目

第14図3	第Ⅵ層		碗	14.1 —— ——	乳白色	淡い緑色をした白釉	無文		———	胴部は直線的
第14図4	第Ⅵ層	白磁	碗	14.8 —— ——	乳白色	灰白色	無文		———	胴部に多少の張り
第14図5	第Ⅵ層	青花	杯	8.2 —— ——	白色	白色	外面胴部に草文		———	内湾形
第14図6	第Ⅵ層	青花	碗	—— —— 5.3	白色	高台部分以外はすべてが施釉	外面高台と胴部にそれぞれ2本の圏線内面見込みに圏線と福の字	———		胴部に丸味
第14図7	第Ⅲc層			—— —— 6.8				———		———
第14図8	第Ⅵ層	褐釉陶器	不明	—— —— 3.8	褐色	内面に透明釉外面は無釉	内面に把手状の貼付けが見られる。	———		壺底
第14図9	第Ⅱ層	壺屋陶器	碗	—— —— 6.8				———		———
第14図10	第Ⅱ層	壺屋陶器	碗	—— —— 6.4	黄色褐色	内面蛇の目高台白釉で外面黒釉の掛け分畳付は無釉		———		胴部に円味
第14図11	第Ⅱ層	壺屋陶器	香炉	—— —— 5.8				———		胴部へ直立
第15図1	第Ⅱ層	壺屋陶器	小型壺	—— —— ——	赤褐色	無釉内面鼠色外面褐色	頚部に七本の圏線内面にはロクロ痕明瞭	———	———	撫で肩
第15図2	第Ⅲc層	喜名陶器	小型壺	12.7 —— ——	赤褐色	無釉内面赤褐色外面褐色	無文		———	———
第15図3	第Ⅲc層	壺屋陶器	小型壺	—— —— ——	赤褐色	無釉内面赤褐色外面褐色	無文	———	———	
第15図4	第Ⅲc層							———		———

第15図5	第Ⅲc層	壺屋陶器	擂鉢	―― ―― ――				―――		―――
第15図6	第Ⅲc層	安南青花	碗	4.3 5.9 7.3	灰白色	内外面にダークグリーンの透明釉で内底は蛇の目高台	外面に草花文印判口縁内外に圏線が一本づつ			―――
第15図7	第Ⅱ層	壺屋呉須	碗	―― ―― ――		内外に白釉	外面に		―――	―――
第15図8	第Ⅲc層	褐釉陶器	香炉	―― ―― 6.3	灰　色	外面無釉内面には褐釉	無文　　足付	―――		―――

出土陶磁器からみた伊礼原B遺跡

今回採集され図示された陶磁器の総数は26個である。この遺跡の性格を考えるために、時期差を無視して器種別にみたら、碗が14個と過半数を占め、圧倒的に多い。つづいて、花生け3個、小形壺3個、香炉2個、擂鉢1個他となっている。碗が多いことは、グスクなどの遺跡の出土状況と変化はない。しかし、26個に占める花生、小形壺と香炉の出土数が多く、その意味では通常の生活の場と言うよりは祭祀遺跡的な感じを受ける。

次にこれらの陶磁器の時期について考えてみよう。出土陶磁器の中で最古のものは第13図10、15、第13図2、6などである。第13図10の印花文のある青磁碗は、石垣島名蔵湾のシタダル遺跡から大量に出土するもので15世紀の前半に位置づけられている。注①

さらに第14図6は、内底部見込みに「福」の字のあるもので小野正敏氏の編年では15世紀前半から中頃に位置づけられている青花碗である。注② 同図6の青花花生もこの時期のものと見て良いのではないかと考える。相対的にはこれらの遺物は15世紀の中頃との考え方が妥当である。

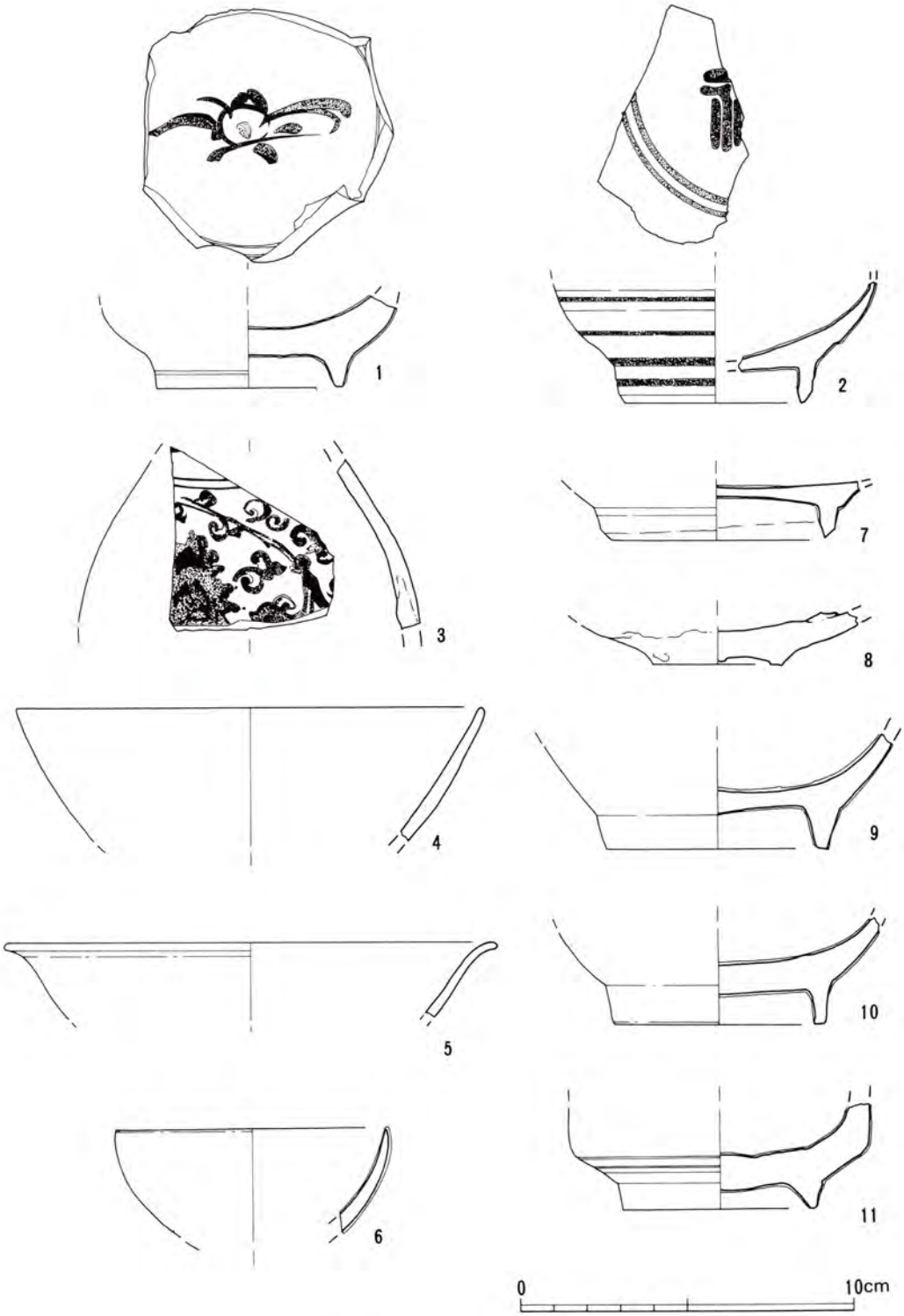
このようなことから陶磁器からは、15世紀なかごろ、さらに第13図14、17などの青磁は16世紀にまたがり、第14図1、5、第15図の6などは、17～18そして、壺焼の18～19世紀とつづくことから考えると15世紀以来継続して本遺跡が存続したことが伺える。15世紀代には至近の位置にある北谷グスクの後半期と重なる部分もあるので、両者の関係についても充分に配慮する必要があろう。

（知　念）

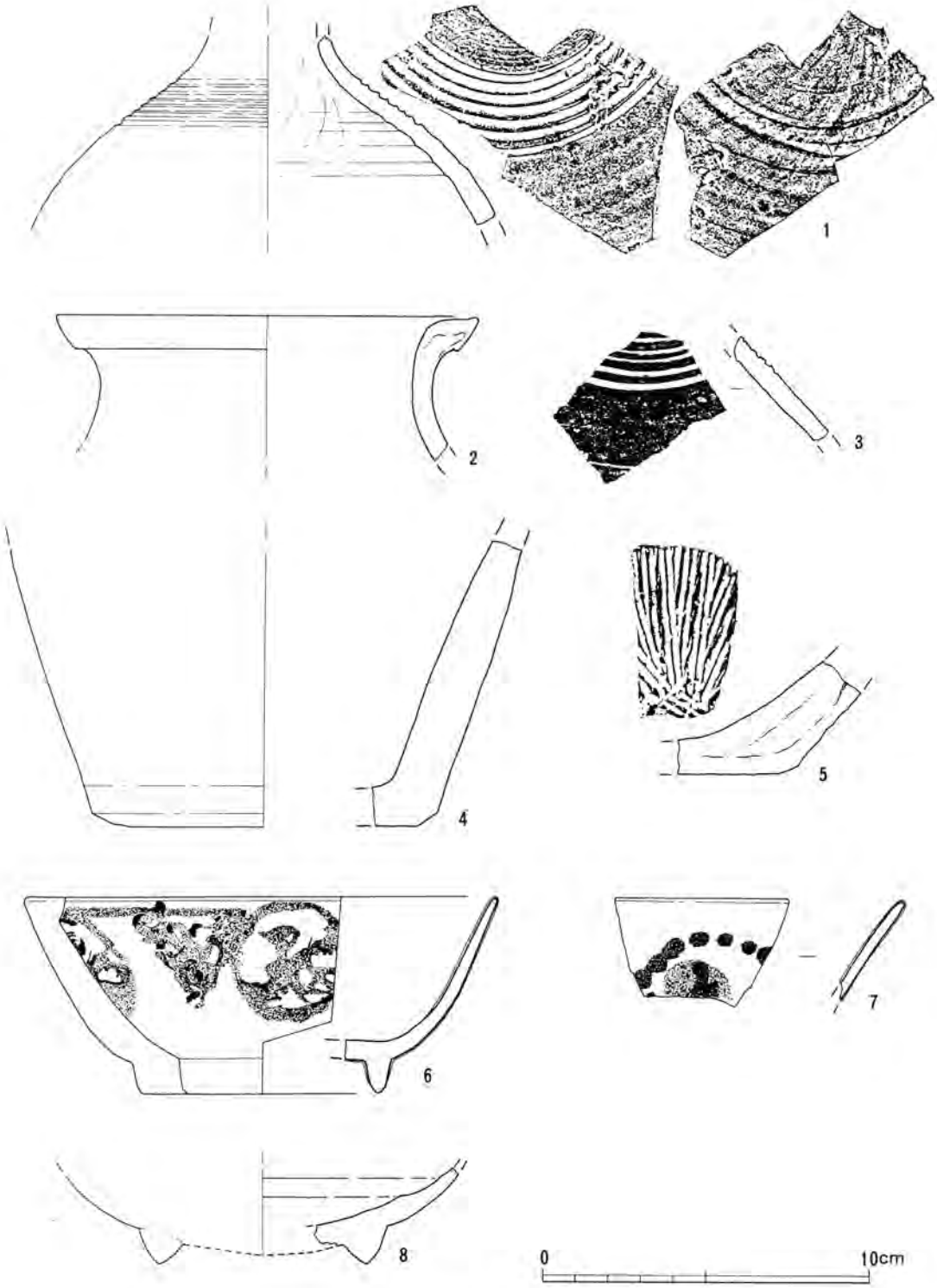
文　献

① 亀井明徳「先島諸島採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁　上』沖縄県立博物館　1982年

② 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会1982年



第14図 青花・白磁・陶器実測図



第15図 陶器実測図

石器

石器の出土は極めて少なく、第３区ｃ小区の南側溝から、２点のチャート製のチップが検出しただけである。いずれも、２ｃｍ内外の不定形で、使用痕は見られないものである。

装飾品

装飾品は貝製品１点、骨製品２点の合計３点で、いずれも第３区第Ⅷ層の出土であった。貝製品は長さ７㎝、幅5.5㎝のやや小振りのオオツタノハを輪切状にカットしたもので、一部、石灰分の付着があるものの、全体的に手擦れの光沢をおびる（第16図１）。

同図２の骨製品は海獣骨のU字状の部分を取り込んで作られたものである。正面観は長さ5.5㎝、幅2.5㎝の長方形に切り取り、その両隅に正面からは深く、裏面からは浅く穴を穿ったものである。穴は両側の方向への紐擦の痕をのこす。光沢はなく、海獣骨の特有な気泡状の穴がみられる。

同図３は高さ4.5㎝、横幅６㎝で、大形のブダイ科の右上咽頭骨を用いた未製品である。正面（内側）の凹凸部分を研磨して均し、右付け根部を切断の後、その中央部に穴を穿つ途中、破損のため放棄したものである。

自然遺物

第Ⅵ層の自然遺物は数点の人骨と、イノシシ・牛・馬・犬などの獣骨、ブダイなどの漁骨がみられる。

人骨については松下孝幸先生による、後述の所見にゆだねたい。

獣骨については川島由次先生による、後述の所見にゆだねたい。

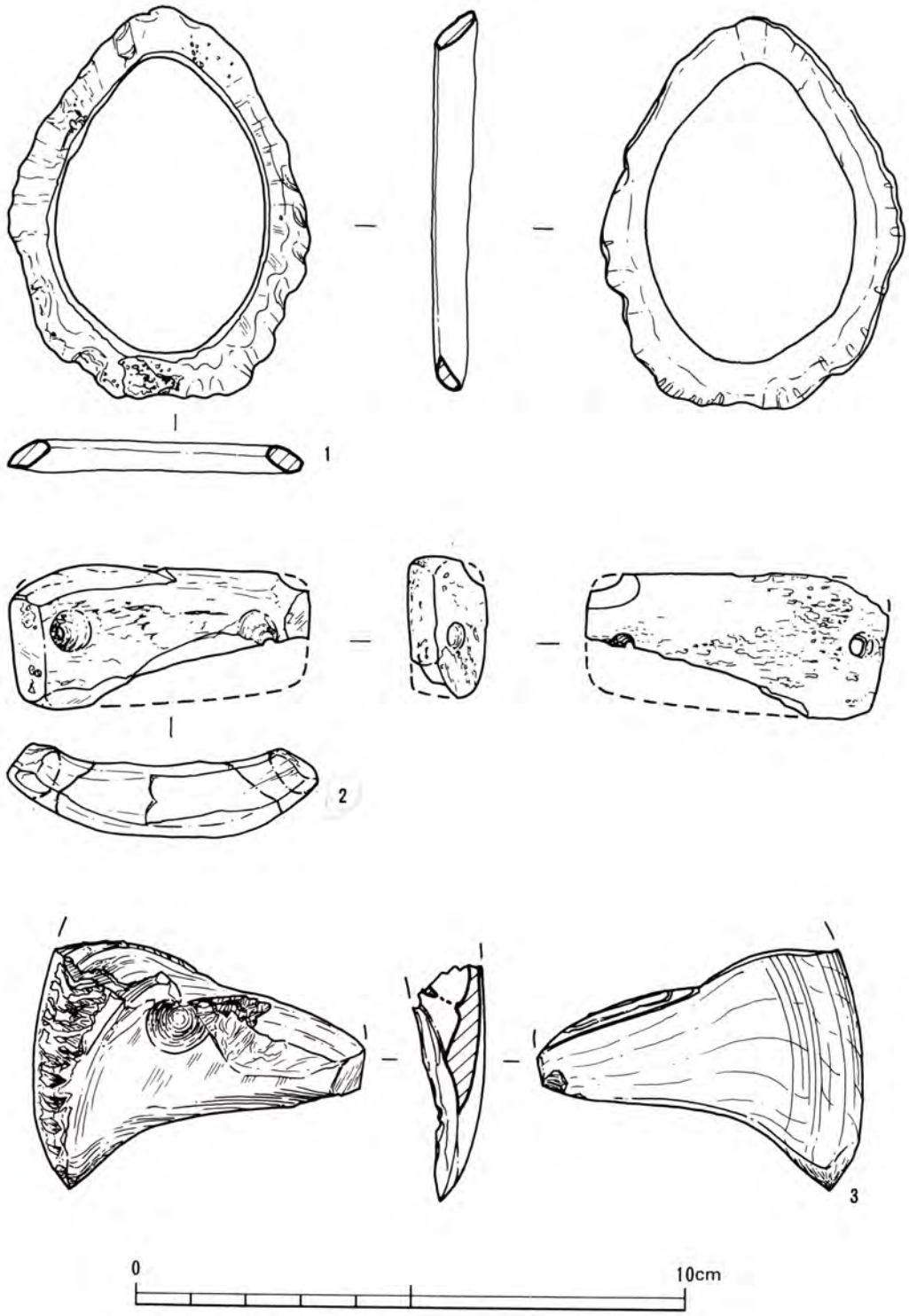
漁骨については破片で少ないことから、今回は割愛することとした。

第Ⅷ層の自然遺物は前述に寄り、とくに、多量に出土した貝殻について述べる。

貝殻は25キログラムの袋74個分、総重量１、85屯の出土がみられた。補食の貝殻と自然死骸の区別がつけがたく、ひと袋をランダムサンプリングし、分類をこころみた（第３表）。

これらの貝殻について「カワラガイ、ウラキツネ、オイノカガミ、ユウカゲハマグリ、R、シラトリなど二枚見が著しく多い。これらの種は内湾の砂泥底に生息する種類である。現在の海岸でも、これらの貝類の打ち上がった死殻は多く見られる。他の貝類の出土数も、内湾に打ち上がった貝類の組成と矛盾しない。基本的には、食糧残滓というより、内湾性貝類残り打ち上げ堆積物と考えられる。」との所見を沖縄生物学会の黒住耐二氏からいただいた。

一部、食糧残滓の貝殻もあるものの、大半は前述の所見によるものと考えられる。



第16図 貝製品・骨製品実測図

第 3 表 出土貝殺種類一覧

種　　類		左	右	重量	備考
カワラガイ	*Fragum unedo* (L.)	217	243	3,240 g	
ウラキツキガイ	*Codakia paytenorum* (Lredale)	167	170	1,260 g	
オイノカガミガイ	*Dosinia histrio* (Gmelin)	158	138	955 g	
ユウカゲハマグリ	*Pitar citrinus* (Lamrck)	79	107	675 g	●
R. ザルガイ	*Vasticarium flavum* (L.)	60	74	1,132 g	●
R. シラトリガイ	*Quidnipagus palatam* (Lredale)	54	65	430 g	●
カブラツキガイ	*Anodontia edentula* (L.)	36	36	125 g	●
ヒメリュウキュウアサリ	*Tapes phenax* pilsbry	34	34	240 g	●
ユキガイ	*Meropesta nicobarica* (Gmelin)	32	17	115 g	●
R. バカガイ	*Mactra maculata* Gmelin	30	26	330 g	●
マガキガイ	*Conomurex luchuanus* (L.)	24		480 g	●
ニッコウガイ	*Tellinella virgata* (L.)	16	24	260 g	●
サメザラモドキ	*Semele carnicola* (Hanley)	11	6	40 g	●
イソハマグリ	*Atactodea striata* (Gmelin)	9	10	50 g	
サラサバテイ	*Tectus maximus* (Phillippi)	9		1,140 g	●
ホソスジイナミ	*Gafrarium pectinatum* L.	9	8	80 g	
スダレハマグリ	*Katelysia japonica* (Gmelin)	8	8	8 g	
タママキ	*Mactra cuneata* (Gmelin)	4	8	1 g	
C. サザエ	*Turbo argyrostomum* (L.)	7		640 g	●
マスオガイ	*Psammotaea elongata* (Lamarok)	6	3	30 g	
ウスハマグリの一種	*Pitar* sp.	6	3	1 g	
シラナミ	*Tridacna maxima* (Röding)	1	5	490 g	●
R. アサリ	*Tapes litevatus* L.	3	5	43 g	
アジロイモ	*Conus* pennaceus Born	5		20 g	
マダライモ	Virro*Conus ebraus* (L.)	4		60 g	
ウミギク	*Spondylus* spp.	4		60 g	
アラスジケマンガイ	*Gafrarium tumidum* (Roding)	2	3	60 g	●
ヤキイモ	*Conus magus* L.	3		55 g	
イボシマイモ	*Conus lividus* (Hwass)	3		40 g	●
トミガイ	*Polinices tumidus* (Swainson)	3		28 g	
キイロダカラ	*Cypraea moneta* L.	3		16 g	
ホウシマノタマガイ	*Clyptonatica lurida* (Philippi)	3		5 g	
ケシヨウオミエンガイ	*Pitar obliquatum* (Hanley)	3	1	2 g	
オキシジミ	*Cyclina sinensis* (Gmelin)	3		2 g	
モチヅキザラガイ	*Cyclotellina remies* (L.)	2	2	170 g	●
イトマキボラ	*Pleuroploca trapezium* (L.)	2		150 g	●
シレナシジミ	*Geloina soaxans* (Gmelin)	1	2	70 g	●
オニノツノ	*Cerithium nodulosum* (Bruguiére)	2		70 g	
R. マスオガイ	*Asaphis dichotoma* (Anton)	2	2	60 g	
ヌノメガイ	*Periglypta puerpera* (L.)	1	2	40 g	
ホシキヌタ	*Cypraea vitellus* L.	2		40 g	
ネジマガキ	*Gibberulus gibberulus gibbosu* (Rödins) (Broaerip Sowerby)	2		16 g	
シオボラ	*Cymatium muricinum* (Röding)	2		12 g	
ジュズカケサヤガタイモ	*Conus coronatus* (Gmelin)	2		10 g	
ミドリアオリ	*Pinctada panaseae* (Jameson)	2		10 g	
サヤガタイモ	*Conus fulgetrus* (Sowerby)	2		8 g	

種　類		左	右	重量	備考
アマサギガイ	*Macalia bruguierei* (Hanley)	2	1	3 g	
ハナビラダカラ	Cypraea annulus L.	2		3 g	
エガイ	*Barbatia decussata* (Sowerby)	2		1 g	
ヒメツキガイ	*Ctena divergens* (Philippi)	2	2	1 g	
クモガイ	*Lambis Lambis* (L.)	1		330 g	●
ギンタカハマ	*Tectus pyramis* (Born)	1		100 g	●
R. サルボウ	*Anadara antiquata* (L.)		1	60 g	
C. ハマグリ	*Meretrix lamarckii* Deshayes	1		50 g	
クロチョウガイ	*Pinctada margaritifera* (L.)	1		50 g	●
ニシキウス	*Trochus maculatus* L.	1		30 g	●
サメザラ	*Scutarcopagia scabinata* (L.)		1	25 g	●
オオウラウズ	*Astralium rhodostoma* (Lamarck)	1		23 g	
ヒメジャコガイ	*Tridacna cracea* Lamarck		1	20 g	
カバミナシ	*Conus vexillus* (Gmelin)	1		20 g	●
コオニコブシ	*Vasum turbinellum* (L.)	1		12 g	
クロミナシ	*Conus marmoratus* L.	1		10 g	
ヤナギシボリイモ	*Conus miles* (L.)	1		10 g	
C. サザエのフタ	*Turbo argyostoma* L. (Operculum)	1		10 g	
ニシキアマオブネ	*Nerita polita* L.	1		8 g	●
リスガイ	*Mammilla opaca* (Récluz)	1		8 g	
ヒラマキイモ	*Conus planorbis* (Born)	1		7 g	
カツレンマイマイ	*Satsuma mercatoria Katsurenensis* K. & H.	1		5 g	
ノコギリガザミのつめ	*Scylla serrata* (Forskål)	1		3 g	
ガンゼキボラ	*Chicoreus brunneus* (Link)	1		2 g	
O. ヤマタニシ	*Cyclophorus turgidus* (Pfeiffer)	1		2 g	
ヒメニッコウガイ	*Tellinella Staurella* (Lamarck)		1	1 g	
アンボンクロザメ	*Conus Litteratus* (L.)			205 g	●
ホシダカラ	*Cypraea tigris* L.			45 g	●
シュモクアオリガイ	*Isognomon isognomum* (L.)			25 g	●
ムラサキウズ	*Trochus stellaris* Gmelin			10 g	●
ニワトリガキ	*Malleus regula* (Forskål)			10 g	●
カキの一種（A）	*Ostreidae* sp. A			10 g	●
巻貝不明	*Gastropoda* sp.			8 g	●
ヤクシマダカラ	*Cypraea arabica* L.			3 g	●
二枚貝不明	*Bivalvia* sp.			3 g	●
カキの一種（B）	*Ostreidae* sp. B			2 g	●
R. ヒバリガイ	*Modiolus auriculatus* (Krauss)			1 g	●
オキナワヒシガイ	*Fragum loochooanum* Kuroda	1	1	0 g	
ボタンガイ	*Fulvia australis* (Sowerby)	1		0 g	
R. ナミノコガイ	*Lotona faba* Gmelin		1	0 g	
オミナエシガイ	*Pitar pellucidum* (Lam)		1	0 g	
ナツメガイ	*Bulla cruentata vernicosa* Gould			0 g	●
カワニナ	*Semisulcospira libertina* (Gould)	1		0 g	
カンギクのフタ	*Lunella coronata* (Gmelin) [operculum]	1		0 g	
ヒメアサリ	*Ruditapes variegatus* (Sowerby)		1	0 g	

まとめ

伊礼原B遺跡は大まかに、三つの時期が存在する複合遺跡であることが明らかになった。当遺跡は、北東側から流れる徳川の河口近くに位置し、数回の堆積、流出を繰り返し形成されたものであることが明らかになった。

第Ⅷ層の遺物は

Ⅰ類の室川下層式土器（沖縄先史編年前Ⅱ期《縄文前期後半》）の時期、

Ⅱ類の面縄前庭式土器、仲泊A・B式土器（沖縄先史編年前Ⅲ～Ⅳ期）《縄文中期後半～後期前半》）の時期

Ⅲ・Ⅳ類の面縄東洞式土器、嘉徳Ⅰ式土器、伊波式土器（沖縄先史編年前Ⅳ期《縄文後期後半》）の時期

の3時期に分けられ、層位的にもその傾向をとらえることができた。

出土状況をみても第1・2区にはなく、第3区の南東側に集中し、より南東側に中心部が位置することがうかがい知ることができる。

さらに、第Ⅵ層においても第3区の中央部に集中している。遺物の分布の中でも、土器は西側よりに、青磁・南蛮・獣骨は東側による傾向があり、層位的にも区別できた。

Ⅴ層のくびれ平底土器（沖縄先史編年後期後半《弥生中期後半以後》）の時期

青磁・南蛮・青花（グスク時代《15～16世紀》）

の2時期に分けられる。

Ⅴ類土器の一部は特にローリングを受け、第3区の東壁や西壁にみられる第Ⅵ層の旧河川の流れの方向とほぼ一致していることから、それとの関係も考えられる。後者のグスク時代の遺物は、中心部はより東側にあることが知れ、しかも、第3区c小区の第Ⅶ層の白砂層に乗り掛かる状況で出土することが見られることから、第Ⅷ層の遺物の出土状況と同様な方向を示していると考えられる。

以上のことから、両層の中心部は南東側に位置することが想定でき、遺跡の南東側が気になるところである。

遺跡の南東側にはシーサーモー（獅子蔵）という拝所があり、数メートルの石灰岩微高地が立地し、旧伊礼部落もこの地に集中している。試掘の結果から遺跡の北側周辺部には遺物の発見がないことや、沖積低地が広がることなどから、伊礼原B遺跡の生活の場は、この石灰岩微高地の北側縁辺部に、位置する可能性が高いと考えられる。

特に第Ⅵ層のグスク時代の青磁・白磁・南蛮などの出土レベルは、知念氏の指摘のごとく、碗の器種が多いものの、花生・香炉の比率が高い。また、質も他のグスク出土の物よりも選択された観を受ける。さらに、獣骨の出土状況であるが、骨片もみられるものの、特にイノシシ・牛・馬・犬の下顎骨の完全な形が多く目についた。花生・香炉の出土とい

い、単に偶然とは説明できないところがあり、非日常的な活用の場、いわゆる祭祀的な様相を南東側の地に想起せざる得ない。

遺跡周辺の歴史的な環境を追ってみると、少なくとも、今から3000年前（第Ⅷ層）まではサンゴ礫層の海底であったと思われ、現在より奥深く、東側の石灰岩台地の近くまで湾入していたと考えられ、南のシーサーモーの石灰岩微高地は出島的な様相をなし、砂州で続いていたと考えられる。

その後、北東側から砂丘の形成が延び、ナサガ川と呼ばれる一帯がよどみ、第Ⅵ層の主体である有機質砂層が形成されたと考えられる。グスク時代まではそのような状況がつづき、その後、北側の砂丘が遺跡近くまで延びてきて、このあたりが徳川の河口として機能したと思われる（第Ⅳ層）。東側の低地はまだよどんでいたと思われる。

喜名焼以後、このあたり一帯に第Ⅲ層の黄褐色のシルト層が、１m以上堆積する環境がおこる。このシルト層は石灰岩台地にみられる風化土で、徳川の水系を考えると、上勢頭・下勢頭区の地域にあたり、この地域のヤードゥイ（屋取）集落の人々の入居と考えあわせると、うなずける様相である。

彩色の壺屋焼が出土する第Ⅱ層のころ、北側から遺跡の所まで屋敷が張り出してきて、戦前までの地籍図の様相に落ち着いたものと考えられる。

このように、層序と遺物から見た遺跡周辺の歴史的環境が復元でき、その編遷の様相がうかがい知れる。

参考文献

1、河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第９号鹿児島考古学会1974年

2、白井祥平　『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星図書1977年

3、宮城朝光　「渡嘉敷島船越原遺跡の土器について」『花綵』創刊号沖縄国際大学考古学研究会O・B会1979年

4、高宮廣衛、他　「室川貝塚第２～４次発掘調査概報」『沖国大考古』第４号1980年

5、当真嗣一・上原静　「伊武部貝塚発掘調査について」『南島考古だより』第25号1982年３月

6、田里友哲　『論集　沖縄の集落研究』離宇宙社1983年

7、益田一、他　『日本産魚類大図鑑』東海大学出版会1884年

8、北谷町教育委員会　「上勢頭・下勢頭古墓群」『北谷文化財調査報告書』第３集北谷町教育委員会1986年

付　　記

沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・佐伯和信*・小山田常一**

【キーワード】：沖縄県北谷町、縄文時代脛骨、グスク時代頭蓋片、散乱骨

はじめに

伊礼原B遺跡は河川改修工事に伴なう試掘調査で発見された遺跡で、沖縄県中頭郡北谷町字伊平伊礼原（213－1番地など）に所在する。この遺跡は1988年の秋に発掘調査が行われ、人骨が検出された。

人骨はすべて散乱骨で、その残存量も少なく、その特徴を明らかにすることはできなかった。しかし、脛骨体は計測が可能であり、また性別や年令を推定することができるものもあったので、その計測結果や人骨の残存部分などを報告しておきたい。

資　料

今回の発掘調査で出土した人骨は合計6点である。

表1　出土人骨一覧　(Table 1. List of skeletons)

人骨番号	取り上げ番号	性別	年令	所属時代	残存部
1号人骨	No. 262	女性	不明	縄文時代後期	脛骨体
2号人骨	No. 98	不明	壮年	グスク時代	頭蓋片
3号人骨	No. 194	男性	不明	グスク時代	頭蓋片
4号人骨	No. 49	不明	不明	グスク時代	頭蓋片群
5号人骨	No. 100	不明	壮年	グスク時代	頭蓋片
6号人骨	No. 44	不明	不明	グスク時代	頭蓋片

* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕

** Jouichi OYAMADA
Department of Oral Anatomy, School of Dentistry, Nagasaki University
〔長崎大学医学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授）〕

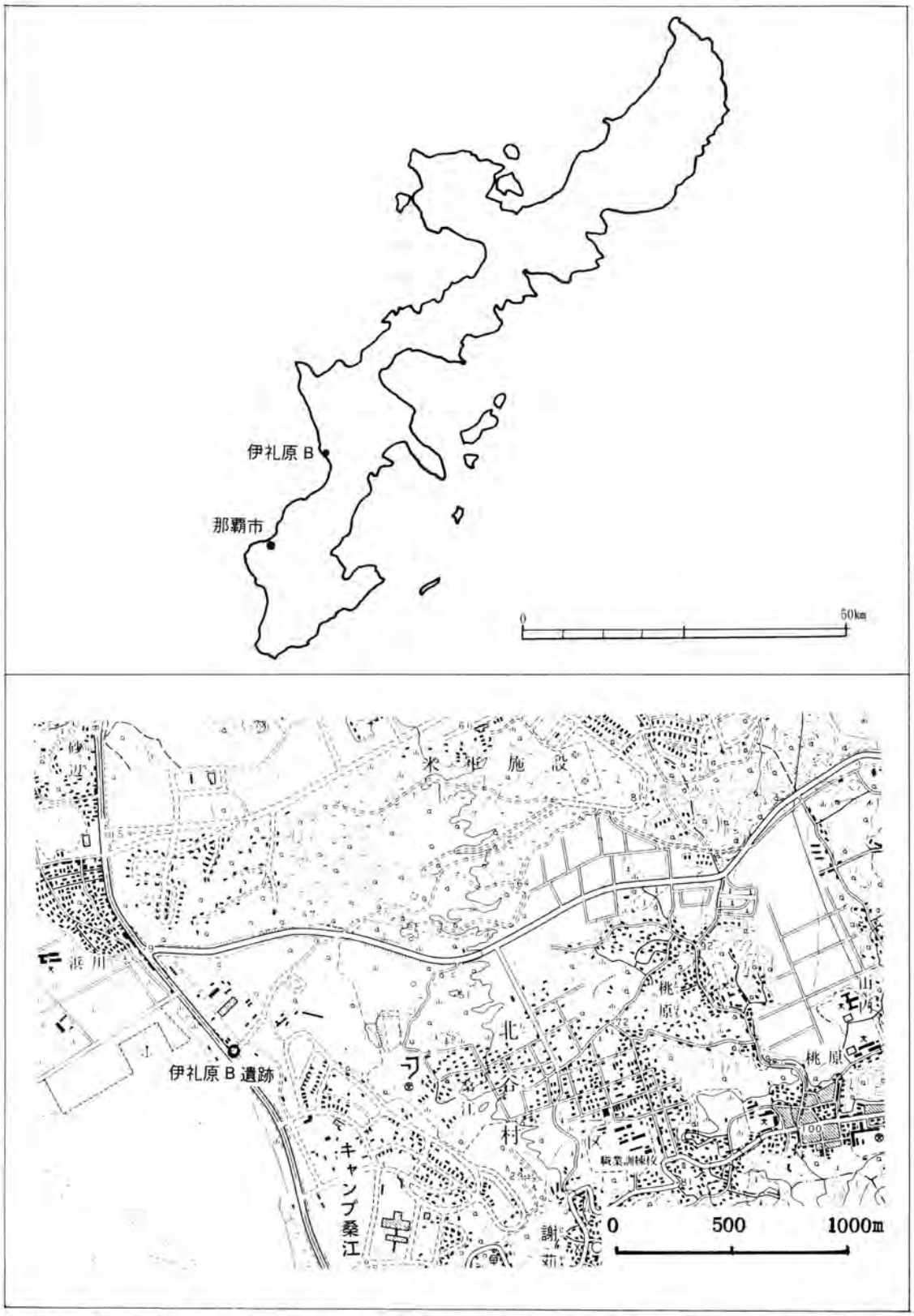


図1　遺跡の位置 (Fig. 1. Location of Ireibaru-B side, Chatan-Cho, OKInawa Prefecture)

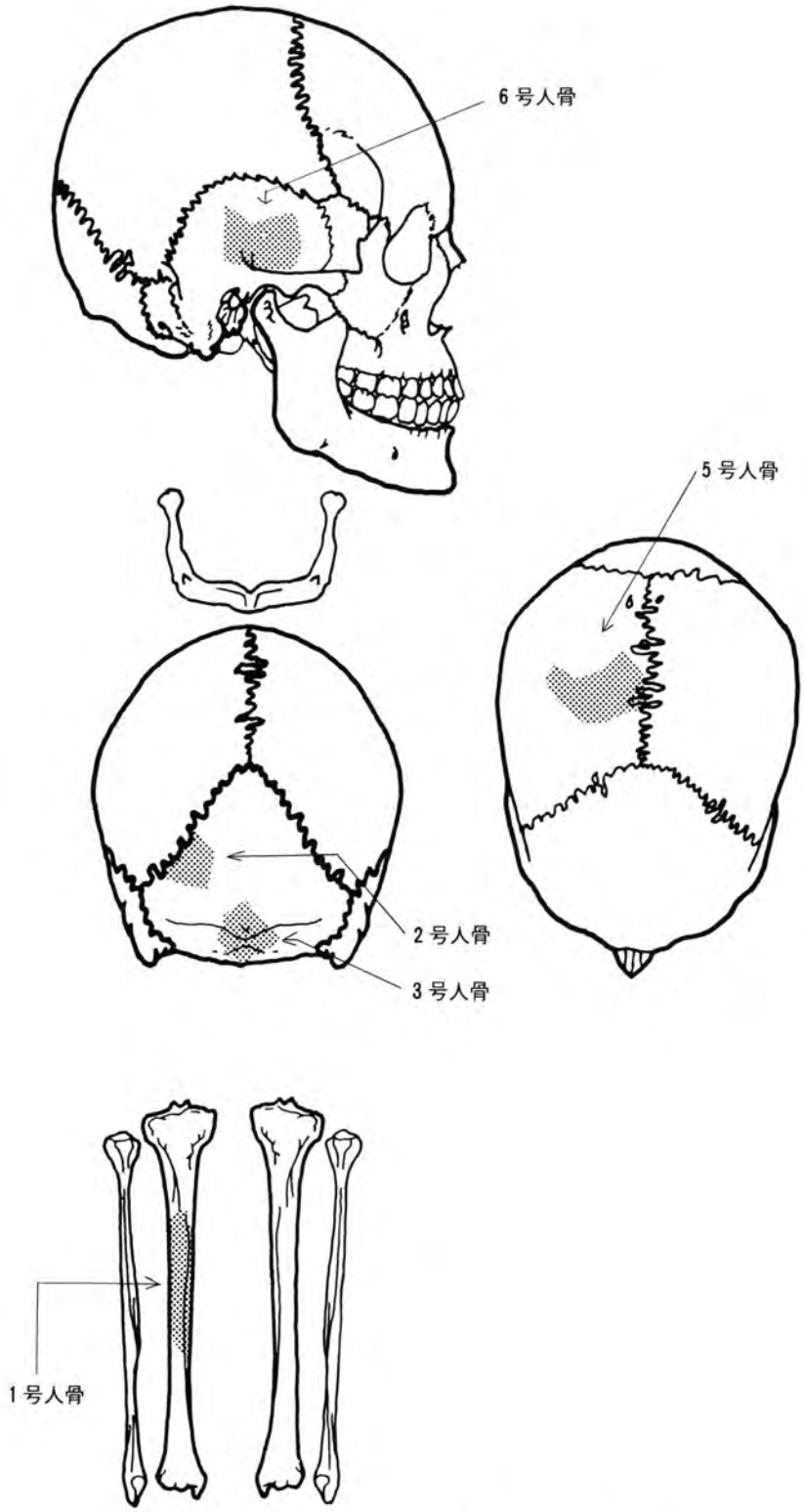


図 2　人骨の残存部、アミかけ部分（ただし、同一個体ではない）
(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

人骨は散乱骨だったので、すべて骨ごとおよび骨群ごとに番号がつけられて、取り上げられた。これらを解剖学的に精査したところ重複する部分はないが、骨質や出土地点などを考慮して、2号人骨と5号人骨以外は別個体と判断した。2号人骨と5号人骨とした頭蓋片は出土した地点が最も近いことなどから、あるいは同一個体かとも考えられるが、確証はない。従って、これらも含めて、本稿では一応すべて別個体と判断し、それぞれに個体番号を付した。

出土体数は上記の精査と推測から、5～6体と考えられる。

これらの人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、脛骨体（1号人骨）は縄文時代後期に、その他はグスク時代（本遺跡は15世紀～16世紀の初め）に属する人骨と推測されている。

計測方法は、Martin－Saller (1957) によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

所　　見

1号人骨　（女性、年令不明）

右側脛骨体が残存していた。保存状態は良好で、骨質は堅牢である。大きさはあまり大きいものではない。ヒラメ筋線の様態は不明であるが、骨体後面には弱い稜が認められるので、その断面形はヘリチカのⅣ型を呈している。

計測は骨体中央部での計測のみが可能で、中央最大径は25㎜（右）、中央横径は19㎜（右）で、中央断面示数は76.00（右）となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は71㎜（右）で、骨体は細い。

骨体の径が小さいことから、本脛骨を女性脛骨と推定した。年令は不明である。

2号人骨　（性別不明、壮年）

後頭骨後頭鱗の左側部である。グスク時代に属すると推定されている。ラムダ縫合が長さ5㎝にわたって認められる。この部分はおそらく内外両板とも開離していたものと推測される。この点からこの人骨の年令は壮年と考えられるが、性別は不明である。

3号人骨　（男性、年令不明）

グスク時代に属する頭蓋片である。後頭骨の外後頭隆起部の右側半分が残存している。この部分の骨壁は著しく厚く、外後頭隆起も著しく発達しており、この部分の厚さは18㎜もある。これらのことから、性別を男性と推定した。年令は不明である。

4号人骨　（性別、年令不明）

頭蓋片が3片存在する。骨質はいずれも堅牢である。1つは頭頂骨の破片（4㎝×4.5㎝大）で、もう1片は後頭骨底部の一部である。残りは右側側頭骨の錐体部である。これら

の残存骨からは、性別も年令も推定することはできない。

5号人骨　（性別不明、壮年）

右側頭頂骨の前頭角付近と思われる部分が残存している。矢状縫合が3cmほど存在する。観察したところではおそらく内外両板とも開離していたものと推測される。このことから、この人骨の年令を壮年と推定した。性別は不明である。

6号人骨　（性別、年令不明）

右側側頭骨の側頭鱗の一部が残存していた。骨壁は薄い。残存部分の大きさは4cm×5cmである。性別、年令はともに不明である。

考　　察

沖縄県での縄文人に関する資料は著しく少なく、本県を含めた南島および九州での縄文人の研究は遅れている。本遺跡から出土した縄文時代人骨はわずか右側の脛骨体のみではあるが、計測が可能であり、その特徴もかなりはっきりしているので、周辺地域の脛骨と比較検討し、本例の特徴を南島の中で位置づけておきたい。

表2で、周辺地域の脛骨との比較を行なった。所見の項でも指摘しているように、伊礼原縄文人の脛骨体はその径があまり大きくなく、非扁平である。骨体の大きさを骨体周でみてみると、沖永良部島の中甫縄文人、徳之島の面縄弥生人、奄美大島の宇宿弥生人、種子島の鳥の峯弥生人よりも大きく、比較的種子島の広田弥生人の平均値に近い。また、時代が大きく異なるが、港川人の値よりも大きい。参考までに西北九州タイプの弥生人の1例である大友弥生人の計測値を表2に掲げたが、本例を含めて、南島の縄文・弥生人の脛骨の大きさは、大友弥生人よりひとまわりあるいはふたまわりも小さい。中央断面示数は港川人の67.50よりもはるかに大きく、また、中甫縄文人、広田弥生人の平均値よりも大きく、鳥の峯弥生人、宇宿弥生人そして面縄弥生人に最も近い値を示していることがわかる。すなわち、大きさでは広田弥生人に、形態的には面縄弥生人に近い脛骨である。

次いで、視点を変えて、まず、①南島の縄文人との比較を行なってみて、②次に沖縄本島での時代変化を考えてみることにする。

沖永良部島の中甫縄文人の脛骨は著しく小さく、その小ささは一際きわだっており、中央断面示数も70.00を超えてはいるが、伊礼原縄文人はもとより南島の弥生人群よりも小さい示数である。一方、伊礼原縄文人の脛骨は大きく、骨体は非扁平であり、中甫縄文人との差はかなり大きい。

沖縄本島で時代を追って脛骨をみてみると、港川人の脛骨の大きさは伊礼原縄文人よりわずかに小さく、クジチ近世人は70.29mm（7例）で、伊礼原縄文人と大差ない。すなわち、骨体周はこの三者ではあまり大きな差はない。しかし、中央断面示数は港川人が67.50で、

表 2　脛骨計測値（女性、右、㎜）（Table 2. Comparison of mesasurements and indices of female right tibiae）

		伊礼原B 縄文人（松下・他）		中甫 縄文人（松下）		面縄 弥生人（松下）		宇宿 弥生人（松下）	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	1	25	1	22	1	24	1	23
9.	中央横径	1	19	1	16	1	19	1	18
10.	骨体周	1	71	1	62	1	68	1	65
10b.	最小周		—	1	56	1	65	1	61
9/8	中央断面示数	1	79.00	1	72.73	1	79.17	1	78.26

		広田 弥生人* (九州大学)		鳥の峯 弥生人* (九州大学)		港川人 (馬場・他)		大友 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	6	25.5	3	23.7	2	24.50	27	27.26
9.	中央横径	6	19.0	3	18.3	2	16.50	29	19.48
10.	骨体周	6	70.7	3	67.3	2	68.00	27	74.74
10b.	最小周	11	63.7	5	61.6	2	63.00	23	68.17
9/8	中央断面示数	6	74.6	3	78.0	2	67.50	27	71.79

＊左側

伊礼原縄文人は79.00、クジチ近世人は75.98（7例）となり、港川人は扁平であるが、後二者は非扁平で、特に伊礼原縄文人の示数値は著しく大きい。

一方、奄美大島と大隅諸島の弥生人群をみてみると、骨体周は65㎜～70.7㎜の範囲にあり、中央断面示数は74.6～79.17で、骨体には扁平性は認められない。このように沖縄の人骨を除き、奄美諸島と大隅諸島だけで検討すれば、縄文人の脛骨は骨体の径が小さく、また弥生人よりは骨体が扁平であるが、弥生人になると、骨体の径が大きくなるとともに、骨体は非扁平化への傾斜を強めているのである。

以上のことから、伊礼原縄文人脛骨は南島全体で捉えると、縄文人としてはかなり特異的で、非縄文人的な脛骨であるといわざるを得ない。しかし、面縄弥生人の脛骨はもっと非扁平化の程度が強いことも考慮しておく必要があろう。一見、複雑で、矛盾しているようにみえることも資料の整備が進めば、本県での形質変化をもっと簡明に解釈することができるものと考えている。

要　　約

沖縄県中頭郡北谷町にある国道58号線で、河川工事に伴って遺跡（伊礼原B遺跡－北谷町字伊平伊礼原）が発見され、1988年に発掘調査が行なわれた。

人骨はすべて散乱骨で、その特徴を明かにすることはできなかったが、一部計測できるものもあり、また性別なども判別できるものもあったので、計測や観察を行なった。その結果は、次のとおりである。

1．残存していたのは1本の脛骨体と5片（群）の頭蓋片で、一応6体分と推定した。

2．所属時代は、脛骨体が縄文時代後期に属しており、それ以外はグスク時代の人骨である。

3．女性脛骨体の径は小さく、中央断面示数は著しく大きく、扁平性は認められない。

4．頭蓋片のうち、性別を判別できたのは1例のみで、これは外後頭隆起が著しく発達しているので、男性骨（3号人骨）と推定した。

5．頭型や顔面の特徴の一部を推測できるものは存在しなかった。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた北谷町教育委員会社会教育課の諸先生方に感謝致します。》

表 3　脛骨計測値（mm）　(Tibia)

		伊礼原 1号人骨 縄文時代 女　性
		右
8.	中央最大径	25
8a	栄養孔位大径	－
9.	中央横径	19
9a.	栄養孔位横径	－
10.	骨　体　周	71
10a.	栄養孔位周	－
10b.	最　小　周	－
9/8	中央断面示数	79.00
9a/8a	栄養孔位断面示数	－

参考文献

1. Hisao Baba, Banri Endo, 1982 : Postcranial Skeleton of the Minatogawa Man. The Minatogawa Man (The University Museum, The University Tokyo, Bulletin, 19) : 61－195.
2. 九州大学医学部解剖学第二講座、1988：日本民族・文化の生成、2、九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版、東京
3. Martin－Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart : 429－597.
4. 松下孝幸、1979：宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚、鹿児島考古、13：210－220.
5. 松下孝幸、1981 a ：大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）：223－253.
6. 松下孝幸、他、1983 a ：鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：236－261.
7. 松下孝幸、他、1983 b ：鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第1・第2貝塚（伊仙町埋蔵文化財調査報告書1）：51－64.
8. 松下孝幸、他、1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴（鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書）：33－58.
9. 松下孝幸、他、1988：沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財（6）－クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書－：106－140.

1 号人骨（女性）

2 号人骨（性別不明）

3 号人骨（男性）

5 号人骨（性別不明）

4 号人骨（性別不明）

6 号人骨（性別不明）

伊礼原 B 遺跡出土人骨

Human Skeletal Remains Excavated from Ireibaru B Site, Chatan-Cho, okinawa Prefec-ture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
〔Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University〕
Jouichi OYAMADA
〔Department of Oral Anatomy, School of Dentistry, Nagasaki University〕

In 1988, human Skeletons excavated from Ireibaru－B Site, Chatan－Cho, Okinawa Prefecture, are 6 individuals. No.1 is a female right tibia of the late phase of the Jomon period. This tibia is small and is not flat. No. 2～No. 6 are fragments of the skull, the Gusuku period. Thus the characteristics of the Gusuku people at Ireibaru－B site are unknown.

伊礼原B遺跡の獣骨について

琉球大学農学部　川　島　由　次

本遺跡の獣骨はコンテナ4個分であったが、分類・調査の結果、ウシは2個体分、ウマも2個体分、イノシシが7個体分で最も多く、イヌは2個体分であった。

図1はウシの上腕骨を、図2にウシの中手骨を示した。ウシの骨格は現生の黒毛和種の中型の体格のウシとほとんど等しいであろうと思われた。ウシの個体数の推定は臼歯数を根拠とした。すなわち、ウシには前ならびに後臼歯が24本あるが、本遺跡には上顎の臼歯が19本、下顎臼歯が8本合計27本であったので2個体分とした。

図3にウマの中足骨を、図4にウマの下顎骨の下顎体を示した。図3では現生のヨナグニウマの標本と比較して示した。最大長は遺跡出土骨の方がやゝ長かったが、図4の下顎における臼歯列の長さを比較したところ、167mmでヨナグニウマと一致した。そこで当時のウマはヨナグニウマとほぼ同程度の体格ではなかろうかと思われた。図4に示した下顎骨には犬歯がない。ウマの雄には犬歯が出現するので図4の個体の性は雌ということになり、歯の摩耗の程度から老齢の個体と判断された。ウマの個体数は臼歯数と下顎体が左右2個体分（計4個）が区別できたのでその根拠とした。

図5にイノシシの下顎間結合部と右下顎体を示した。犬歯が小型なので雌であり、5～6才の個体と判断した。下顎間結合部は黒く変色していたので、直火で焼かれたものであった。図5に示した雌のサイズはほぼ現生のリュウキュウイノシシのものと変化はなかったが、断片的に出現した雄のものと思われた骨には現生のリュウキュウイノシシを上まわるものもあった。破かいの程度がひどくて厳密に比較検討できないのが残念であるが、当時イノシシの家畜化（飼育）は行われていなかったであろうと思われた。その根拠としては2～3月齢以下と思われる幼獣がかなり含まれていたからである。幼獣が多かったせいか成獣の臼歯は上顎のもの4本、下顎のもの15本合計19本しかなかった。一方、肩甲骨関節部が右側7個、左側5個が出現したので7個体分と判断した。

表　伊礼原遺跡出土獣類骨一覧

		ウシ	ウマ	イノシシ	イヌ
肩甲関節	R			7	
	L	2	1	3	
上腕骨頭					1
上腕骨滑車		2		8	
前腕骨	橈骨	1		3	
	尺骨		1	4	1
中手（足）骨		3	1	4	
指（趾）骨		1		1	
寛骨臼窩				8	1
大腿骨頭		1			
大腿骨滑車		5	1	5	
大腿骨	脛骨	1		4	
	腓骨				
距骨				1	
踵骨		1		1	
下顎体		2	4	42	5
下顎枝		3	1	8	
下顎間結合				5	
歯	切歯	2	4	2	
	犬歯			7	
	臼歯	27	31	19	

図1　ウシの右上腕骨遠位部

図2　ウシの左中手骨遠位部

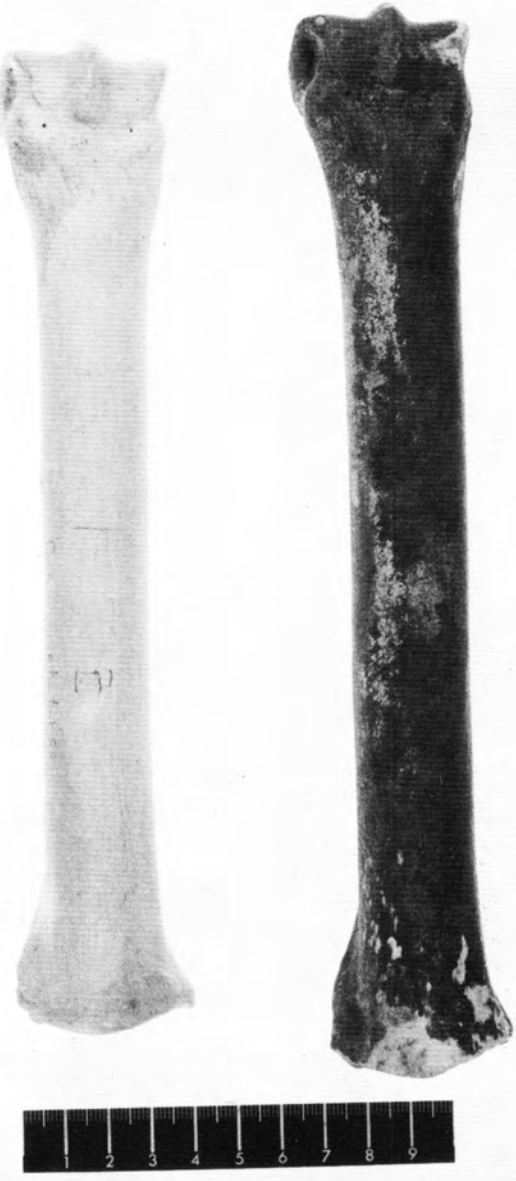


図3　ウマの左中足骨
右は出土骨、左は現生のヨナグニウマ

図4　ウマの下顎骨（下顎体）
上は左側、下は右側で同一個体のもの。犬歯が生えていないので雌

図5　イノシシの下顎骨（下顎間結合部と右下顎体）

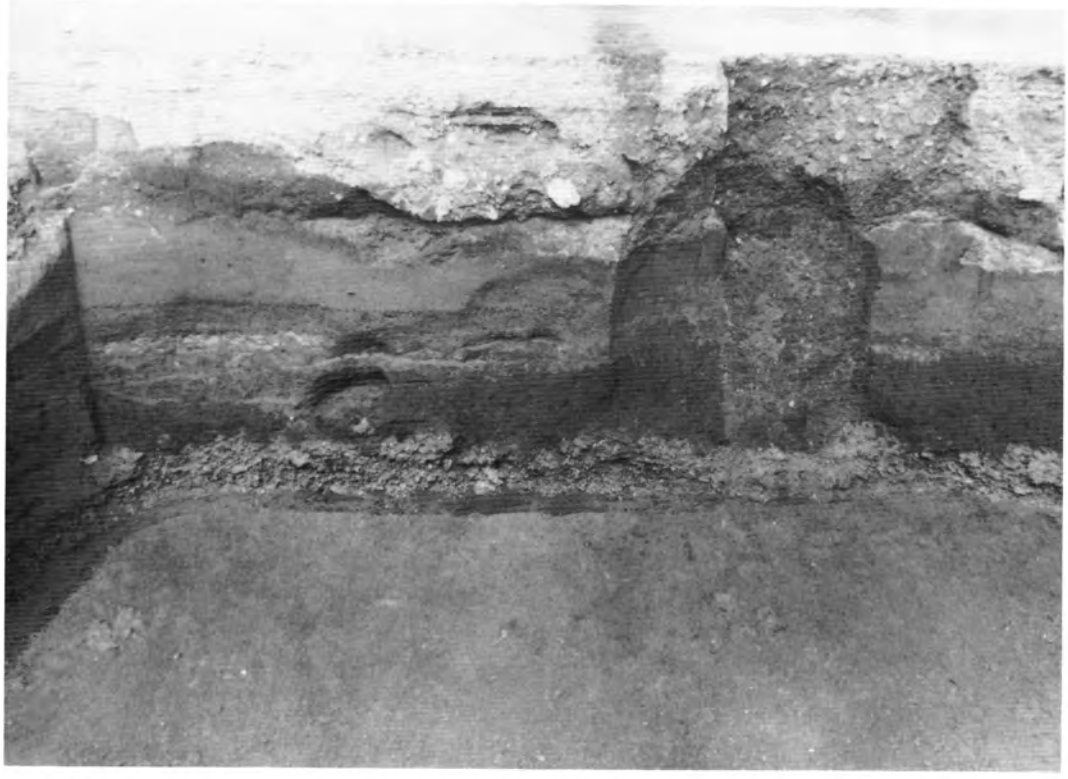
図　　版

伊礼原 **B** 遺跡の航空写真

上　伊礼原 B 遺跡遠景　　下　伊礼原 B 遺跡発掘区

上　第 1 区北側壁面の状況　　下　第 1 区西側壁面の状況

上　第 1 区東側壁面の状況　　下　第 1 区完掘の状況

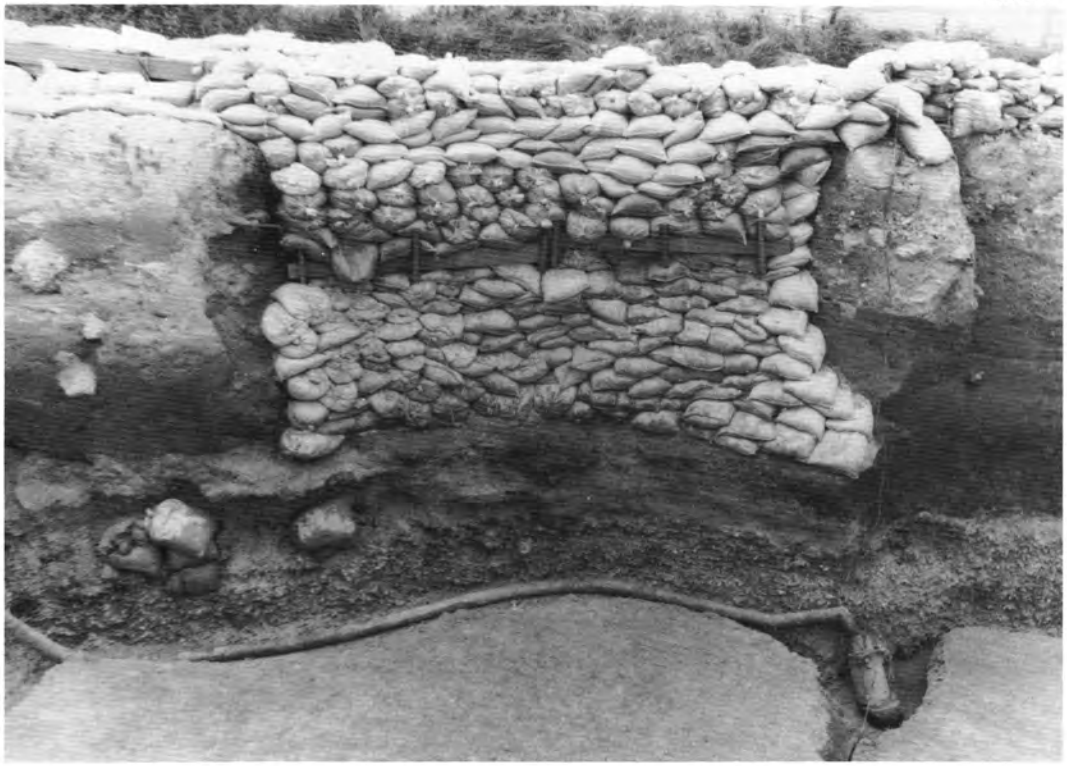


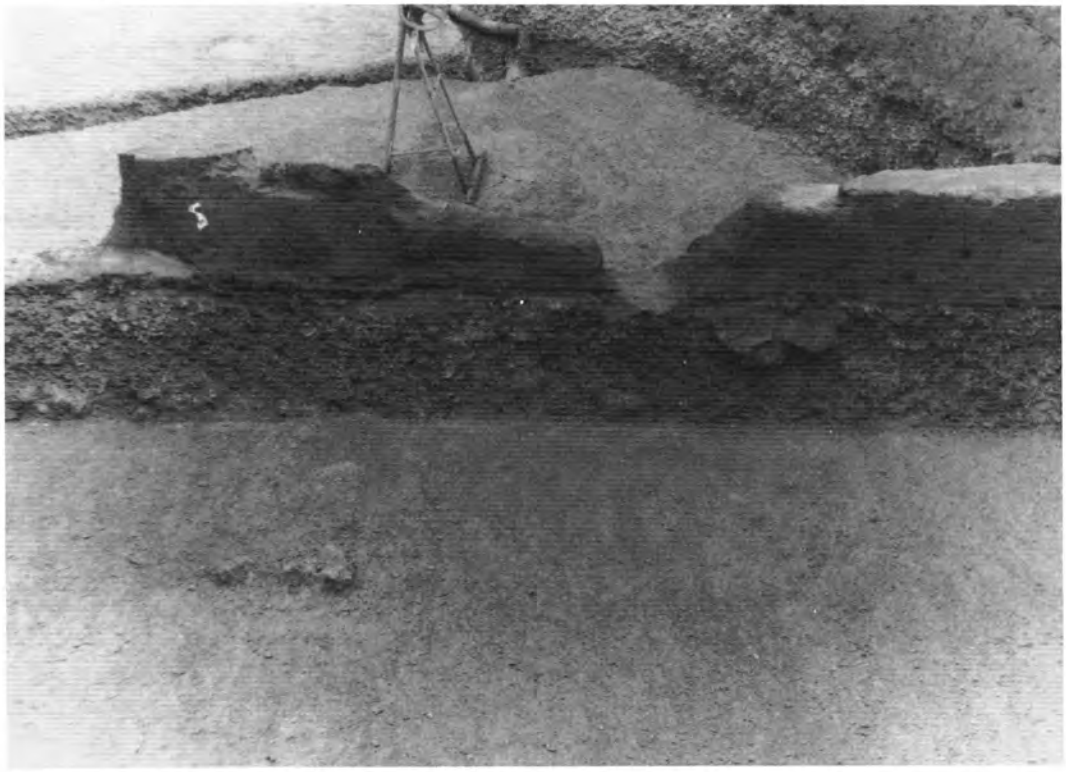
上　第 2 区西側壁面の状況　　下　第 2 区東側壁面の状況

上　第 3 区西側壁面の状況　　下　第 3 区西側壁面の土層状況

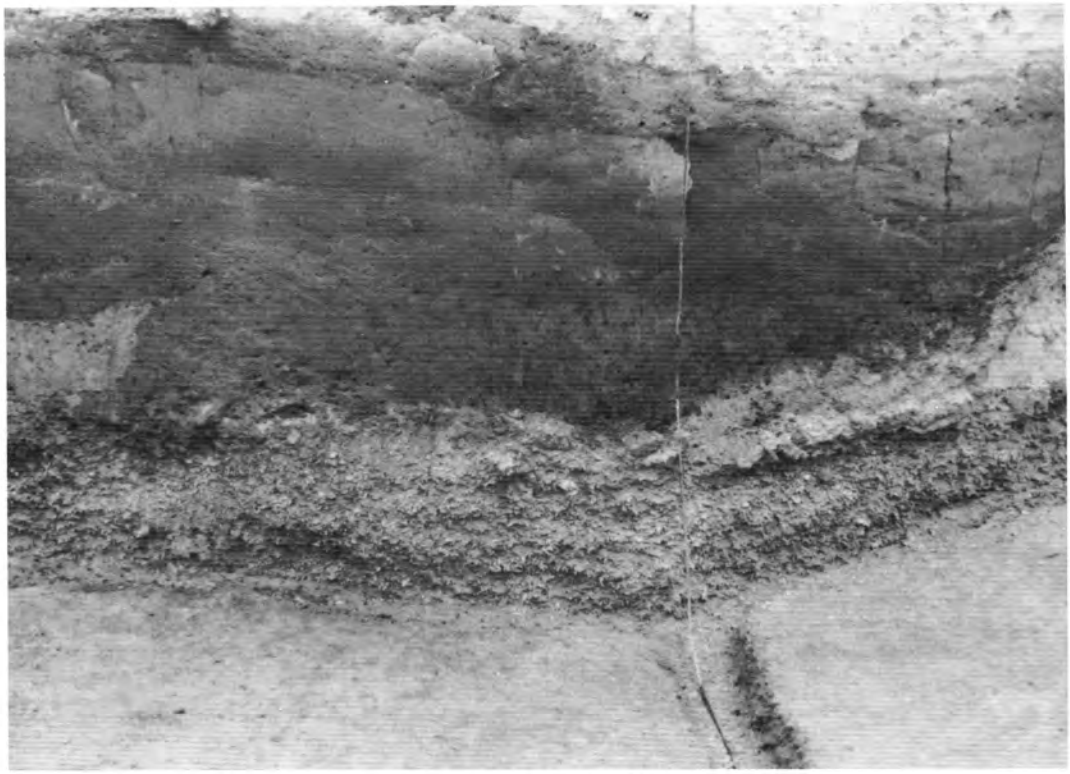
上　第 3 区第Ⅵ層下面の状況（東側から）　　下　第 3 区第Ⅵ層下面の状況（西側から）

上　第 3 区西側土層断面の状況　　下　第 3 区西側土層断面の状況



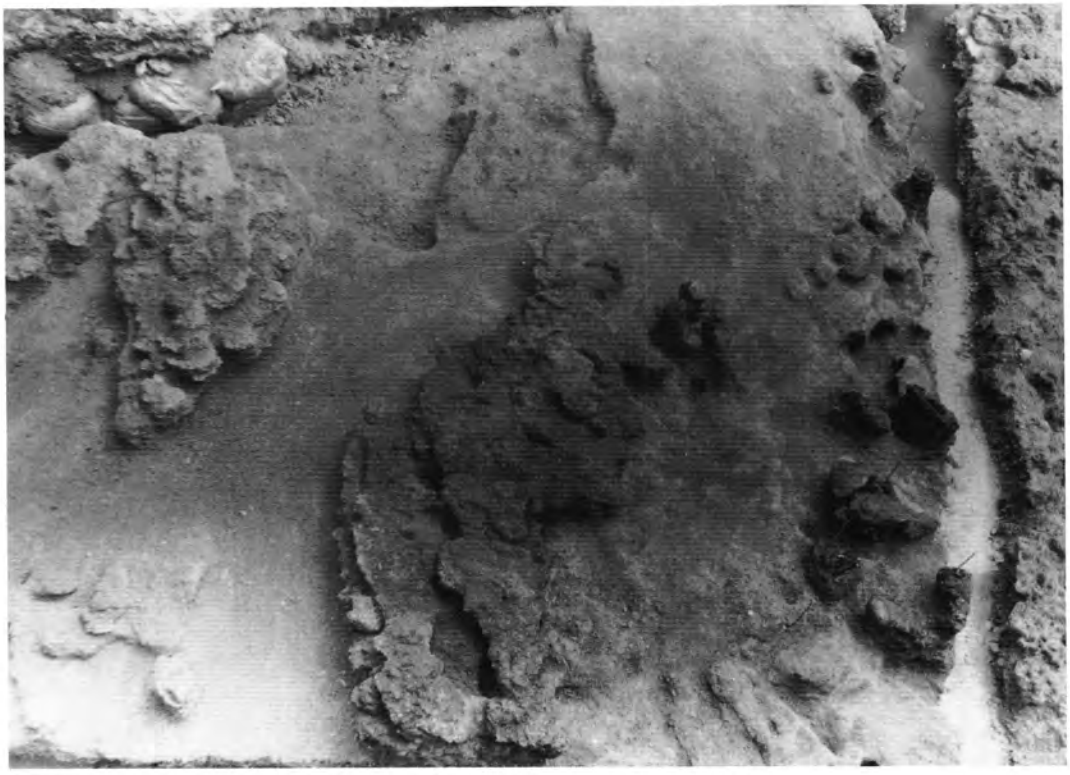


上　第 3 区西側土層断面の状況　　下　第 3 区a、b小区畦の土層断面

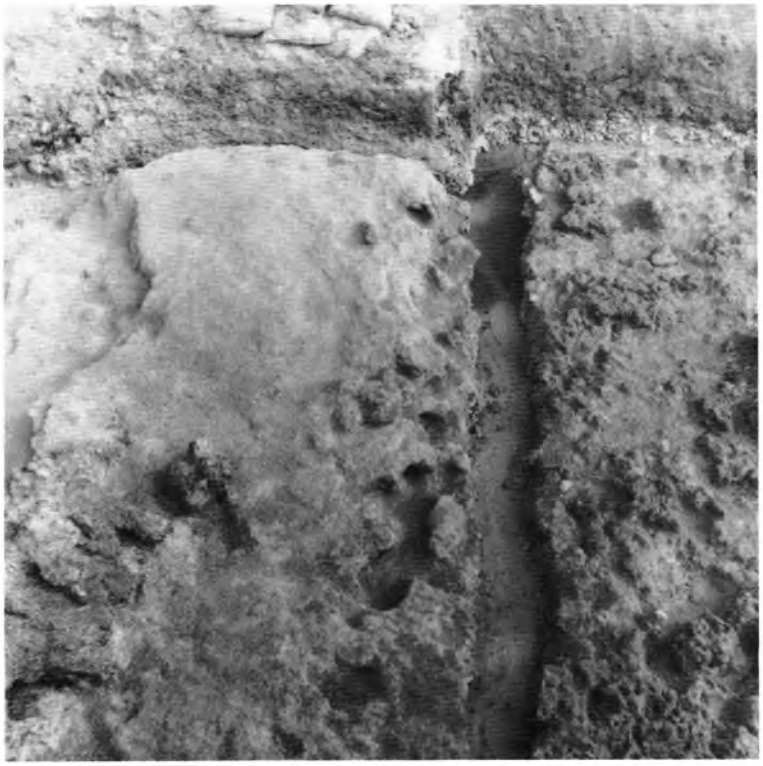


上　第3区東側土層断面の状況　　下　第3区東側第Ⅵ層落込み状況

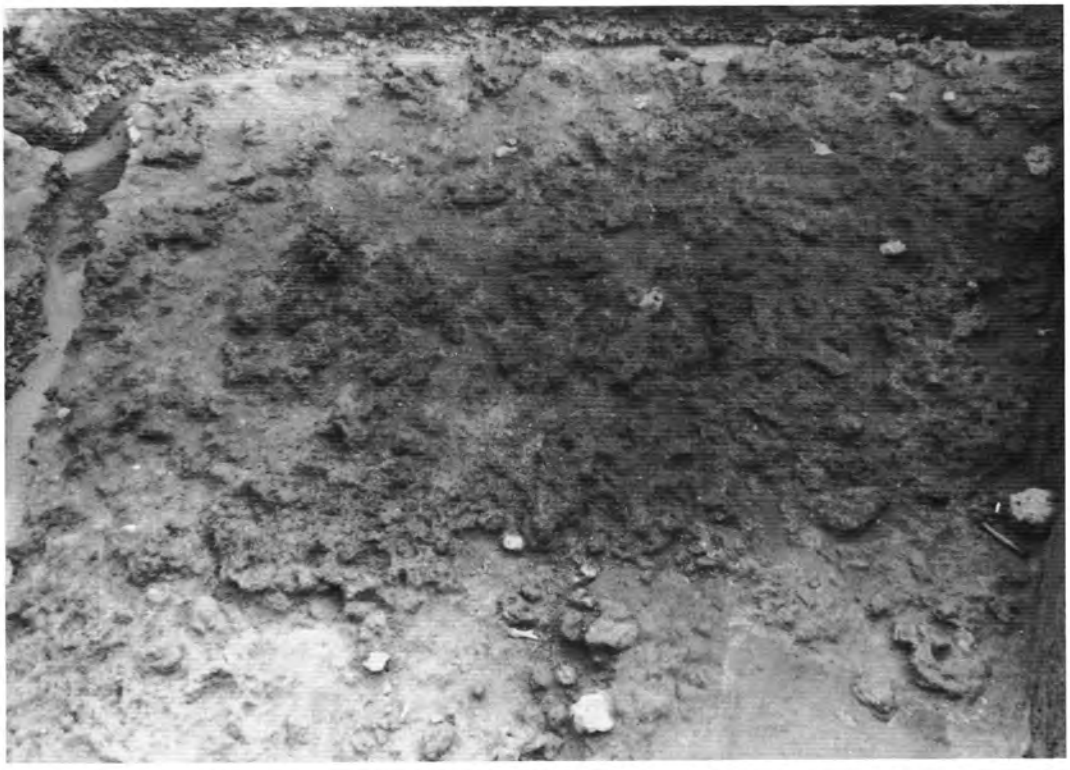
上　第3区a小区第Ⅵ層下面の礫状況　　下　第3区a小区第Ⅵ層下面の礫状況



上　第3区a小区第Ⅵ層下面の礫状況　　下　第3区a小区第Ⅵ層下面の礫状況



上　第３区b、ｃ小区間の落込み状況　　下　第３区b小区の遺物出土状況

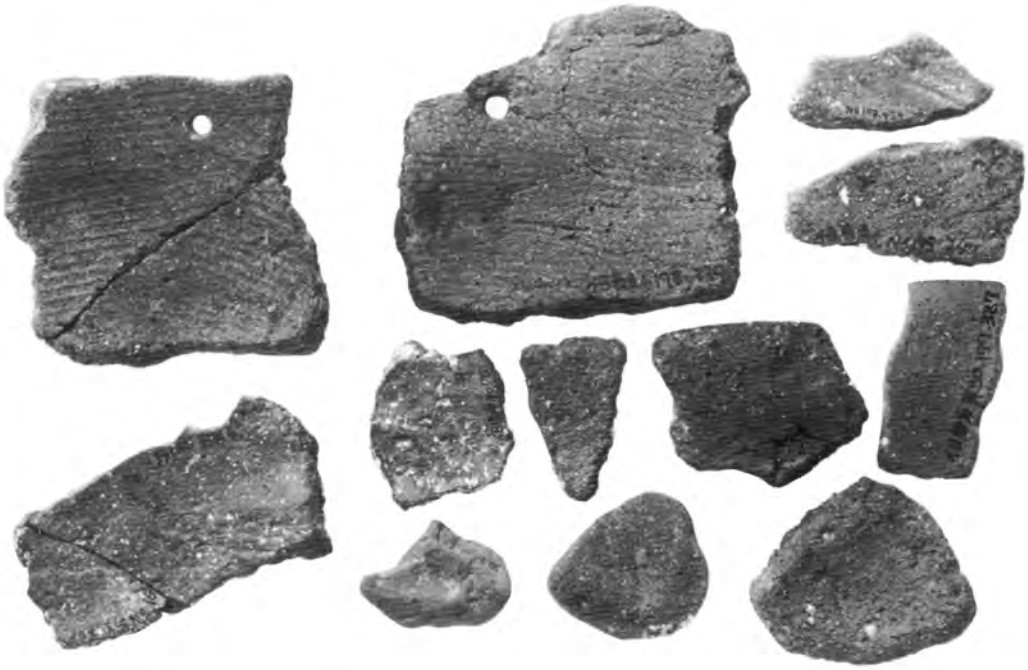


上　第3区b小区第Ⅵ層の遺物出土状況　　下　第3区b小区第Ⅵ層のイノシシ下顎骨出土状況

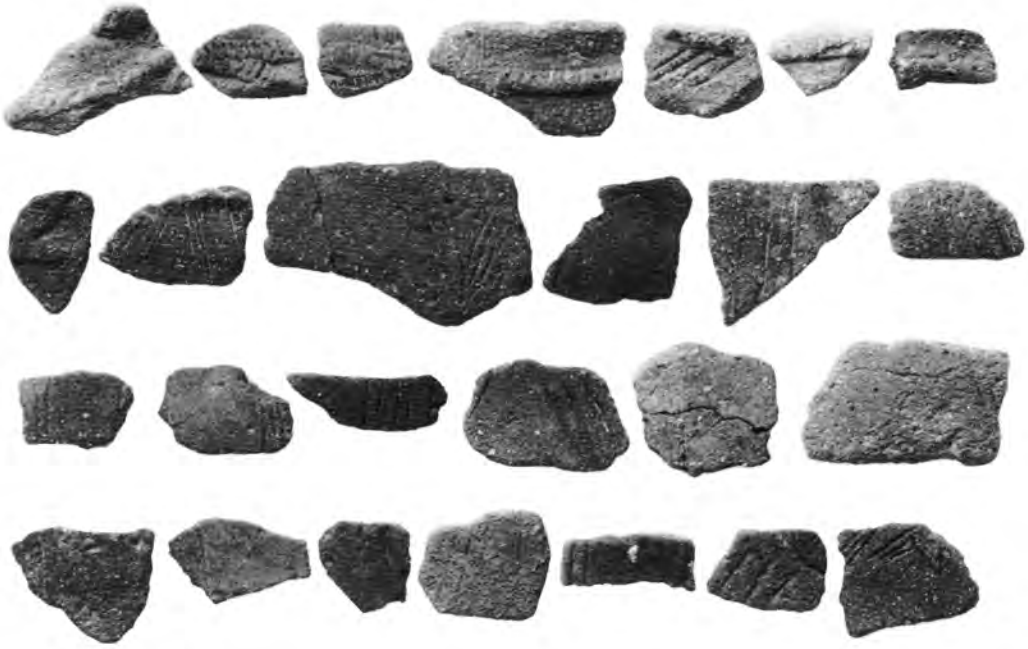
上　第3区a小区第Ⅵ層の牛下顎骨出土状況　　下　第3区b小区第Ⅵ層の遺物出土状況

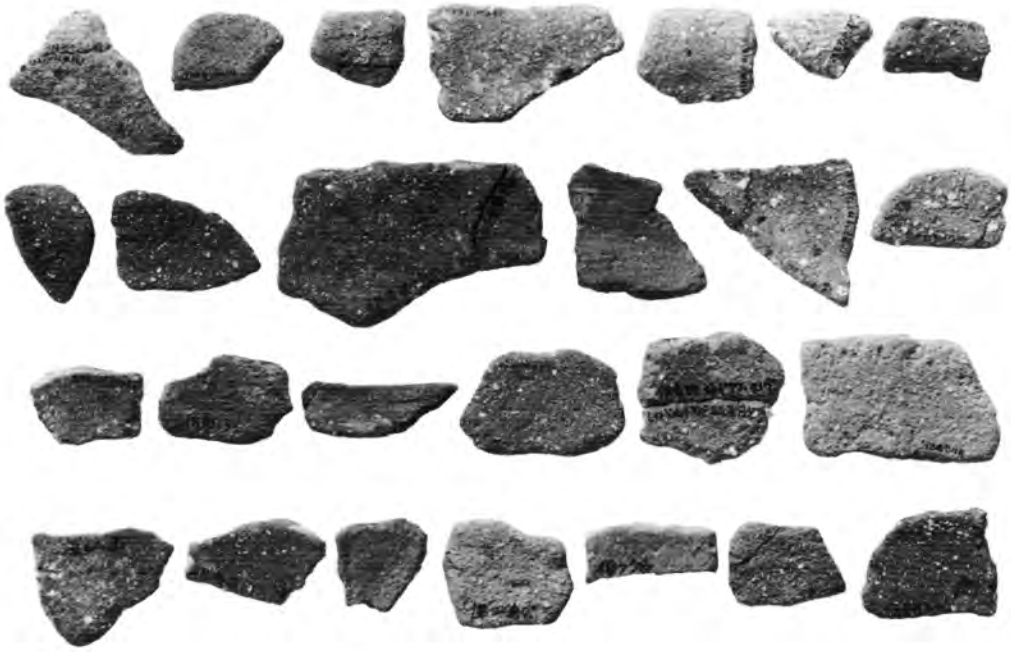
上　第3区b小区第Ⅷ層の状況　　下　第3区完掘状況（東側から）

上　土器Ⅰ類a•b•c表面　　下　土器Ⅰ類a•b•c裏面

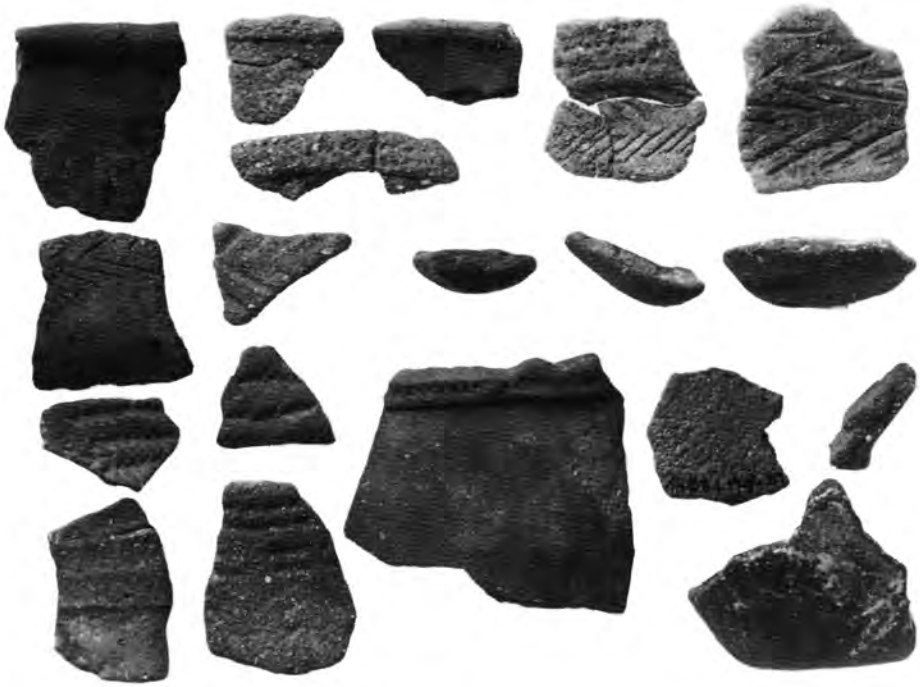


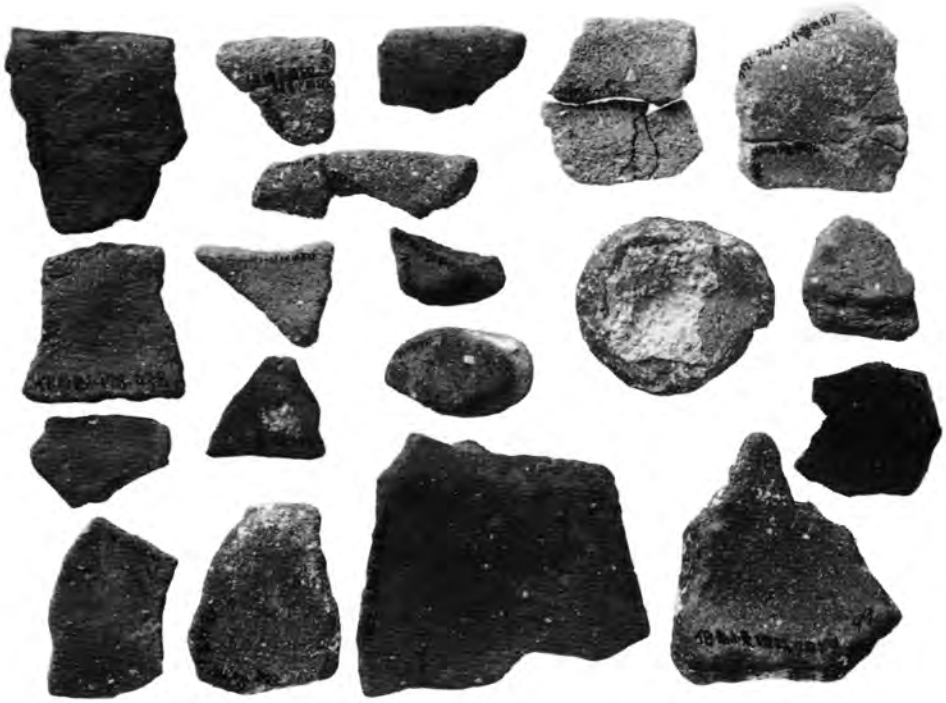
上　土器Ⅰ類c表面　　下　土器Ⅰ類c裏面





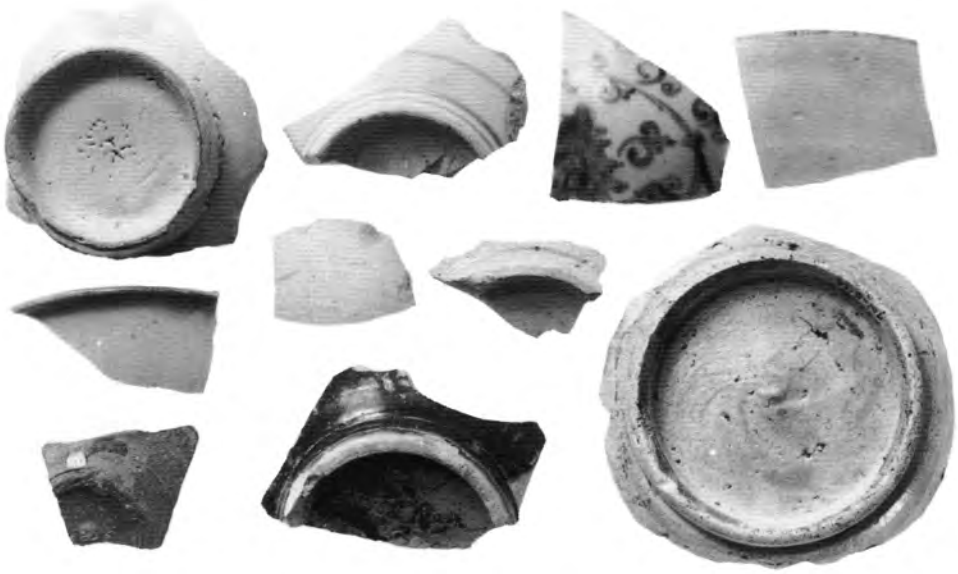
上　土器Ⅱ類d表面　　下　土器Ⅱ類d裏面

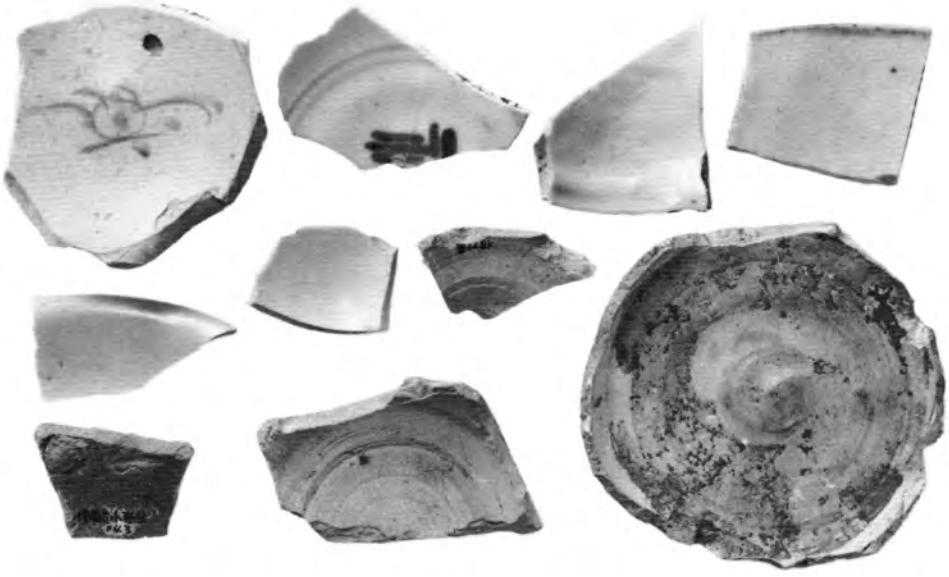




上　土器Ⅱ類e・Ⅲ類・Ⅳ類表面　　下　土器Ⅱ類e・Ⅲ類・Ⅳ類裏面

上　土器Ⅴ類・青磁表面　　下　土器Ⅴ類・青磁裏面





上　青花・白磁・陶器表面　　下　青花・白磁・陶器裏面

上　陶器表面　　下　陶器裏面

上　貝製品・骨製品表面　　下　貝製品・骨製品裏面

086

北谷町文化財調査報告書第8集

伊礼原B遺跡

－旧メイ・モスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査－

発行　北谷町教育委員会
1989年（平成元年）3月31日
北谷町字桑江592
電話（09893）6－3490
印刷　（株）南西印刷
製本　那覇市首里石嶺町1の127
電話（0988）84－4321